
コロナ禍における学生たちの学びと日常

岩田 一正

はじめに

本学の教職課程では、今年度の教職実践演習（中・高）の受講生（主として学部4年生）に対して、以下に示す課題でレポートを執筆してもらうこととなった。

以下から課題を選択し、以前とは異なる（と思われる）2020年の自身の経験について、どういう点が異なっている（と思われる）のか、そしてその2020年の経験について自分はどのように考えたり、感じたりしたのかを、1,200字以上で記しなさい。

- a. コロナ禍と教育実習
- b. コロナ禍の教育と大学生活
- c. コロナ禍と学生生活（アルバイトなど、学校以外の場での事象も含む）

なお、課題を提示した際には、本紀要に掲載することを前提するものであることを伝え、匿名を希望する者、掲載を希望しない者は、その旨を申し出るように指示した。

このような課題に取り組んでもらったのは、受講生の今年度の経験が特異なものであるにもかかわらず、教える側は学習者の経験を十分に理解できていないので、その特異な経験を受講生自身に意味づけてもらい、共有したいと考えたからである。

いつ収束するのかを見通すことはできないが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は、その前後における精神的・物理的な我々の日常、また学校教育の在り方、教師教育（養成教育と現職教育）を転換する甚大な影響を及ぼし得るものと考えられる。そうであるとするならば、今後の教育実習、大学教育、学生生活は、今年度にそれらに取り組んだ学生たちのさまざまな葛藤、苦悩の経験を踏まえたものとなることであろう。それゆえ、教職実践演習（中・高）の受講生たちの今年度の経験は、その葛藤、苦悩の一端を照射する史料となることだろう。

ここで、筆者自身の今年度の経験を振り返れば、非常勤先の2大学と本学の計3大学で授業を担当し、主としてZoomを利用したライブ配信授業を行い、ハイブリッド授業も実施した。資料や課題を提示したり、レポートを回収したりするLMS（Learning Management System、本学ではWeb Classという名称）が大学によって異なり、年度当初の開講時期も大学によって大幅に異なり、この違いに対応することに労力を費やすこととなった。また、開講後も各大学からさまざまな指示や案内が届き、それにも対応しなければならなかった。それゆえ、どう教えるのかということに関心が奪われ、授業中だけでなく、授業の前後においても、学生たちが何をどのように学び、どのような困難を抱えているのかについて、例年より関心が向かわなかつ

た状況にあったと言える。

主たる授業方法となったライブ配信授業に即して言えば、学生たちはデータ・ダイエットなどの理由からカメラをオフとしているため、対面授業とは異なり、どのように学んでいるのか見えないし、ブレイクアウト・ルームのセッション（対面授業で言えばグループ学習）において学生同士がどのように学び合っているのかもわからないので、教える側の話す内容が多くなりがちとなり、学生たちの学びに眼が向かわなくなることに拍車がかかってしまうこととなった。このような教える側の状況を踏まえると、受講生が綴る今年度の経験は、見えにくかった学習者側の経験の一部を開示してくれる貴重な史料となることだろう。

以上のように考え、受講生には前記した課題に取り組んでもらうこととした。また、受講生にとっては、将来的に自分の、あるいは同一年齢集団の教育実習や大学生活などを想起する手掛かりを提供するものとなり得るだろうとも考えた。

以下で見ていくように、第一節には前記した a の課題について、第二節には b の課題について、第三節には c の課題について、受講生たちが綴った文章で、掲載が許可されたものすべてを掲載している。特定のものを選ぶよりも、コロナ禍における学生の経験の多様な様相を提示することができると思ったからである。1,200 字以上のレポートを求めたが、大幅に上回るものが多かった。受講生たちが、他者に伝えたいさまざまな思いを抱えていたことが想像される。

なお、受講生の率直な思いを伝えるため、実習校名や指導教諭名などの固有名を匿名化したこと、また明らかな誤字脱字は修正したこと、さらに読みやすさを考慮して読点を補ったり、改行を施したりしたこと以外には、レポートに手を加えなかった。それゆえ、表記の揺れが散見されるかもしれないし、一部に失礼な表現が存在するかもしれないが、読者のご寛恕を乞いたい。

第一節 コロナ禍と教育実習

ここでは、学校や教師がコロナ禍への対応で忙殺されるなかで行われた教育実習が、受講生たちにとってどのような経験であったのか、そしてそこで、どのような困難に遭遇し、どのような葛藤を抱えることとなったのか、また受講生たちが今年度の教育実習から何を学ぶこととなったのか、何に心を動かされたのかを見ていくこととしたい。

1. コロナ禍での教育実習はどう変化したか 経済学部経済学科 梶俊策

新型コロナウイルスの影響によって全国の学校現場はかつてないほどの混乱に見舞われた。臨時休校や時差登校、グループ活動の制限、生徒や教員自身の健康チェックなど新型コロナウイルスの対策として数多くの取り組みが実施され、すべての学校関係者が対応に迫られた。そして教育実習も例外ではなく、例年とは異なる実習になったと考えている。以下では、その具体的な相違点を私が 2020 年に実施した教育実習での体験も踏まえて述べていくこととする。

第一に、生徒とコミュニケーションをとる機会が例年よりも制限されたという点である。飛沫感染を避けるため、給食中の会話禁止や部活動にて生徒と共に活動することの制限など、例年なら教育実習性が生徒と交流を深める重要な機会が制限されてしまったことは非常に残念であった。そのため、授業時間をはじめ休

み時間や放課後の時間といったわずかな時間を最大限活用して生徒たちとコミュニケーションをとることが求められた。私自身も教育実習において、ほんの少しの隙間時間も生徒との交流を深めるために活用することを心掛けて3週間を過ごした。

第二に、教育実習生として実施する授業の機会が減少してしまった点である。緊急事態宣言に伴う臨時休校によって、教育課程の変更を余儀なくされてしまい、結果として授業の進行が遅れることに繋がった。そのため、授業内容を進めることを最優先にしなければならず、教育実習生が授業を行う時間を削らなければならなかった。幸いにも私の場合は、来年度から正規の教員として勤務することが内定していることもあり、例年通りの授業機会をいただくことができた。しかし、周囲の実習生はやはり例年よりも10コマ前後、授業時数が少なくなっているように見受けられた。

ここまで新型コロナウイルスの感染対策によって生じたマイナスの側面を中心に述べてきたが、私の実習校では生徒たちがコロナ禍であっても、毎日を少しでも充実させようと努力している姿勢が見受けられた。互いの体調を気遣い、限られた状況下で協力し合いながら笑顔を絶やさずに学校生活を送っている生徒たちと、教育実習生として同じ時間を共有できたことは非常に幸せだった。そして私は、人生で経験したことがないような状況の中でも気遣いと協力を忘れずにいることで、プラスの要素を見出すことができると生徒たちから学ぶことが出来たと考えている。

総じて、本年度の教育実習は新型コロナウイルスの影響によって、例年と比較して生徒とのコミュニケーションの機会や授業を行う機会が減少した反面、限られた時間、機会を大切に1日1日を過ごしていこうという姿勢がより強くなった実習になったと考えている。来年度から教員としての生活をスタートさせるにあたって、新型コロナウイルスの影響は依然として継続しているであろうが、すべてを後ろ向きにとらえずに、生徒たちが充実した学校生活を送るサポートをするためにも、常に前向きな姿勢を忘れずに過ごしていこうと考えている。

2. コロナ禍と教育実習 経済学部経済学科 西村幹哉

以下は、コロナ禍と教育実習という観点から、今回の経験を基に自分で考えたことや今後どのように取り組むかを明確にしたものである。

私は、2020年度9月中旬～同月末にかけて3週間母校の中学校で教育実習を行った。今回の教育実習では、コロナ禍ということもあって、生徒や教員も例年通りの行事や日常生活を行うことが出来なかった。コロナ禍で学校内でも多くの自由が奪われていた為、生徒一人一人が多くのストレスを抱えているように感じた。特に、生徒も悩みを抱え、私自身が考えさせられたのが授業や給食、行事活動である。

①授業

授業に関して言えば、教師が授業を行う際に生徒間でコミュニケーションを行うことが出来ず、できたとしても前後のみでしか話し合わせることが出来なかった。しかし、班で討論や意見を共有する際に、「勉強が出来る生徒」や「人見知りせず、自分の意見をしっかり相手に伝えられる生徒」が話す機会が増え、上記に該当しない生徒の中には一度も発言することなく班活動を終える場合もある。そのため、今回のように前後のみや左右2人1組で話し合いを行わせることで、すべての生徒が意見を共有することが出来たように感じた。その結果、私は来年度から教壇に立つ際に授業に全員参加するためにも、今後このような工夫は取り入れていきたいと思った。

②給食

次に、給食で感じたことを述べていきたい。多くの生徒にとって給食の時間は友達同士であらゆるお話をできる時間であり、心身共に落ち着く時間であると思っている。しかし、今年は全員が前を向き一言も話してはいけないため、一番安らげる給食の時間でさえ、生徒は変に気をつかうため、思うように休めていないようにも感じた。

③行事

最後に、行事面で感じたことを述べていきたい。例年であれば、体育祭や音楽祭、修学旅行、文化祭など、クラス目標に向かってクラスが一つになるきっかけでもある行事が多くあった。中学3年生は、今年行われるはずだった行事がすべてなくなってしまい、そのまま卒業式を迎える形になった。私がいた期間は修学旅行に向けての事前準備を行っていた。生徒一人一人が受験準備の時間を割いて家で調べた情報を基に班コース決め等を行っていた。しかし、本当に行けるかわからない状況での班活動のため、クラスの中にも積極的に取り組む生徒もいれば、勉強をしたいという生徒も多かった。その際、いかに教師がクラスを一つのことに向かわせる必要があるかを感じた。すべてのことを教師が言うのではなく、あくまでも生徒が主体的に取り組めるためのきっかけを与えることが大切だと思った。

最後に、私は生徒に気配り、目配り、心配りのほかに、言葉配りが必要なスキルだと感じた。生徒一人一人の考え方が異なる中で、その生徒に合った言葉を選ぶことや一方的に否定し私たちの当たり前を言うのではなく、まずはその生徒に共感してあげることも必要だと思った。生徒が今どのような言葉を求めているのか、どのような言葉をかければやる気や主体性につながるのかを、自分自身でも勉強していく必要があると感じた。あらゆることが制限された状況の中で、生徒が明日も学校へ行きたい、明日も授業を受けたいと思ってもらうためにも、生徒一人一人と向き合い続けたいと思えた3週間であった。

3. コロナ禍での教育実習 経済学部経営学科学生

今回の教育実習においてコロナウイルスの影響により、様々なことが変更になり、大きな影響を受けた。その記録を記していきたい。

今回自分は、東京都の市立中学校で教育実習を行った。初めは5月の下旬から6月上旬にかけての予定で3月にオリエンテーションを行なったが、その時には全国で緊急事態宣言が発令されており、休校になっている状態でどのように開催されるのか、もしくは中止になる可能性もあることを指摘された。実際には当初の予定では行われず、9月の下旬から10月上旬に変更された。

予定を変更して行われた教育実習において、大きな問題となったのは、休校期間が生まれたことによる授業進行の遅れである。その中学校は、本来は50分授業で10分休みのサイクルで学校生活を行なっているが、授業時間を増やすための対策として45分授業で5分休みとし、6時間授業であったところを7時間授業にしていた。これにより、本来予定されていた授業時間よりも大幅に授業が増える形となった。また休み時間が5分になったことで、次の授業の準備がスムーズにいかずに移動しているだけで休み時間が終わってしまうケースも多くあった。さらに授業が遅れてしまっていることで、本来ならば2時間の授業で話す内容を1時間でまとめて教えることが多くなったと担当の教諭がおっしゃっていたので、自分もなるべく授業における説明を短く指導することが多くなった。指導教諭には、自分がなんとかするからコロナ禍だからといって授業スピードをあげなくていいよと優しくフォローしていただいたが、自分のために中学生の授業スピードを下げてしまうのは申し訳ないという思いもあり、なるべく指導教諭と同じスピードで授業することを心が

けた。

学級活動においては、給食の時間では班の形にはするものの、机の形に沿ってシールドを立てることが決まっていたので、会話をする際になかなか難しいことが多くあった。自分は生徒のところに混ざって食べることができなかつたため、生徒と話すことができる大事な時間を奪われてしまったのは少し残念なことであった。さらに掃除の最後には、自分が窓の生徒が触る部分や黒板消しなどを消毒する作業を最後におこなった。道徳の授業において班での活動を中心的に構想していたのだが、生徒にとっては班活動の際にシールドを立て、さらに話し合った後にまた話を聞いてもらうために机を元の形に戻してということは何度も繰り返すことによって、生徒は何度も何度もシールドを立てるのが面倒になってきて、シールドを立てない生徒が出てきてしまうことがあった。今回の学級活動は1年生を担当したこともあり、コロナに対する意識をしっかりと持たせることが大変だと感じるが多かった。

コロナ禍であるにもかかわらず教育実習を実施していただいたことを、本当に感謝している。この経験を活かして今後の生活につなげていきたい。

4. コロナ禍と教育実習 文芸学部国文学科学生

教育実習で最初に戸惑ったのは、生徒全員がマスクをしていることで表情が読み取れないことだ。授業中に生徒の反応を確かめるうえでの情報が目元しかなく、生徒が授業についていけているのかを把握することが難しかった。ソーシャルディスタンスを保ちながらも、机間巡視による生徒ひとりひとりのコミュニケーションを綿密にとることが大切だとより感じた。口元から得る情報が多いということもこの実習を通して学んだ。マスクで口元がおおわれていることで生徒の発言がうまく聞き取れず、生徒に聞き返してしまい生徒が発言をしにくくなる空気を作ってしまった。私も生徒に指示が伝わらないことが多く、自分が思っている以上に大きな声を出すことと、はっきりとわかりやすい話し方が重要であると分かった。また、教師には生徒の発言を他の生徒に伝えるスピーカーの役割が大切だと感じた。私が授業を担当したクラスは一年生で、臨時休校や分散登校の影響でクラスのまとまりがまだ薄く、マスク着用で教室が今まで以上に籠った空間になりがちになっていたため、クラス全体が授業に参加する雰囲気を教師が積極的に作ることが重要であると感じた。

コロナ禍で生徒の学校生活も大きく変化していた。緊急事態宣言期間中は教師による動画配信授業を行い、夏休み前までは半数ずつの分散登校が行われていた。全校集会などの生徒が密になり集まるものは放送での実施に切り替わった。中でも大きな変化は文化祭の中止だ。私が教育実習に行った母校は、文化祭が盛んでそれを楽しみに入学した生徒も多く、悲しむ声が多かったそうだ。そのかわりに学習成果発表会という、部活動での練習の成果を発表する機会が設けられた。私は生徒や指導教諭などから話を聞いただけではあるが、目まぐるしく状況が変わる中で生徒がすぐに順応してその瞬間を楽しんでいる様子がたくましく、キラキラ輝いて見えた。

私は2020年の前半は大学にも行かず家に閉じこもっていることが多かった。今までとの生活の変化についていけずに気持ちが大きく沈んでおり、不安を抱えた状態の教育実習のなかで、高校生が変化を恐れずに自分たちで未来を切り開いている姿に胸を打たれた。教育実習期間中に生徒会の役員選挙が行われ、その中で会長候補の生徒が次の当たり前を自分たちが新しく作っていきたいという言葉が印象に残った。当たり前が当たり前ではなくなったなかで、自分たちで行動を起こすことによって次の当たり前を作っていくという姿勢に、コロナ禍を言い訳にして踏みとどまっている自分を情けなく思い、このままではいけない、変化を

恐れずについていかなければならないと強く感じた。

当たり前が当たり前ではなくなった世界で、以前の当たり前しか知らない私が生徒に提供できるものが何かを考えた時に、私が母校で受けた授業を今まで通りもしくはそれ以上に伝えることだと考えた。私の母校はいわゆる進学校に値する学校ではあったが、教師の話をはたすら聞く授業よりも自分の意見を考えたり、グループワークを行い発表するという授業が多かった。私の指導教諭は高校時代に授業を担当してくれた方で、指導教諭は生徒とのやりとり、対話を重視する授業スタイルであった。教師が一方的に教えるのではなく、教師が授業のコーディネーターとなり、生徒の意見を拾い上げながら生徒が主体となって授業を作っていくというやり方は難しかったが、授業の題材が詩歌ということもあり、生徒の素直な発想の意見をたくさん聞いたことから等身大で生徒と接することができた。

教育実習を通して生徒と接する中で、自分自身を見つめなおす機会を与えてもらった。コロナ禍で変わったことも多くあったが、母校の生徒の勉強や部活、学校生活に対する熱量は私の高校時代と変わっておらず、むしろより高まっていた。変化を恐れず、次の当たり前を作るために行動することの大切さを学ぶことができた。私が授業を通して生徒に教えることよりも、生徒から学ぶことの方が多いい教育実習となった。

5. コロナ禍と教育実習 文芸学部国文学科学生

自分は、8月24日から9月18日まで、母校で教育実習を行った。実は、8月24日から28日までは教育実習、次週から介護体験、9月7日から18日までまた戻って教育実習となかなかハードな生活を送っていた。

元々はコロナによる制限とは関係なく、9月に教育実習を予定していた。その後介護等体験と考えていたが、介護施設の受け入れ人数の制限もあり、日にちに融通が効かなくなってしまった。そのため急遽このスケジュールになった。ただ、自分がこのことを知ったのは、教育実習開始の前の週の水曜日だった。実習校先から知ったため驚くばかりであった。そして実習期間中に介護体験を受け入れてくれる実習校には、本当に頭が上がりなかった。

自分は元々コンビニの夜勤のアルバイトをしている。裏でこんなスケジュールを組まれているとは露知らなく、知った時にはシフトを変えてもらえなかった。前日はシフトが入っていて、当日の3時まで働いていた。実習校は7時半集合で、初日は2時間しか寝られなかった。さすがにコロナウイルス感染、ゆくゆくは死が免れないと覚悟を決めて当日は臨んだことは今でも忘れられない。結果、無事微塵もないスケジュールを乗り越えられて、こうやって紀要に収められるまで生きてこられた。とても貴重な体験をさせてもらったとポジティブに捉えるしかない。

実習校は、一学期、緊急事態宣言で休校になってからリモート授業、解除後は学年、クラスの分散登校を行った。時間割も滅茶苦茶で教員側はかなり疲弊していたに違いない。さらに、二学期が始まる直前に、ICTの機器が取り付けられた。スクリーンとWi-Fiが各教室に置かれたが、使い方を知らない教員が多く不慣れだった。

実習中、一番苦戦したものは教壇実習であった。実習3日目に朝のHRでの連絡事項を任された。連絡事項の前に実習校では礼拝がある。キリスト教の学校であったため、朝と帰りのHRでは讃美歌を歌い、お祈りをする。朝に至っては聖書を読んでそのことについて生徒の前でお話をしなければいけない。自分は、生憎クリスチャンではなく、無宗教の人間である。中・高校生として通っていた時は、礼拝は行われていたが、興味がなく、右から左へと流していた。右から左へ流していた人間が、いざ生徒の前で語らなくては行けなかったのである。そのお話のためにもう一度聖書を読み直し、お話を考えた。お話は、聖書以外に学生

時代のこと大学の勉強の話もできた。学生時代の自分みたいに全く興味がなく、話を聞かなかった生徒はいなかったように感じた。

教材研究は、実習が始まってから扱う題材を決めた。一学期は、リモート授業、分散登校でカリキュラムが削られるなど、どの教材をどのように行ったのか全くわからなかった。もっと事前に聞いていればの一言に尽きる。自分としては、与えられた時間でどれだけの授業を作れるか一番教師として求められる力で、その能力はもっと磨く必要があった。結果、評論文の『月の起源を探る』を扱った。科学的な内容で自分も月がどのようにできたか知らなかったため、同じように勉強した。現状としては一番可能性の高い説は存在するものの、未だに絶対的な立説は存在しない。今回は、文章構成、序論、本論、結論の三段構成をテーマに置いた。ただ、三段構成を扱う予定がいつの間にか科学的な内容へ傾いてしまうところがあった。科学的な内容を生徒に質問された時は、持って帰って後日解答した。やはり、国語教員であっても、国語だけでは教える立場としてはもの足りず、理系的内容、その他どのような内容も満遍なく知っておく必要があることを学んだ。

このように自分の情けなさがより露見された教育実習だったが、生徒とは接する機会が多く持てたことだけは救われたように感じた。コロナウイルスの関係もあってか接することのできる時間は少なく、昼食の時間と休み時間しかなかったが、昼食の時間、休み時間では、どの生徒とも会話ができた。特に、毎週水曜日に提出が義務付けられている日記・連絡帳を目に通し、コメントをする機会が与えられた。その時、中学三年生が抱えている悩み、どのような生活を送っているか会話以外からも伺うことができた。このようなことは大学の学び、机上では学べない、とても貴重な時間を味わえた。

6. コロナ禍の教育実習と教員採用試験 文芸学部国文学科 小田垣朝子

コロナウイルスの流行によって、教職課程を履修している者は様々な点で混乱し不安な思いをしたであろう。私は特に教員採用試験と教育実習において例年と大きく違うことが多く、不安があった。

まず、教員採用試験は主に試験内容に変更があった。千葉県を受験して、例年は筆記試験、集団討論、模擬授業、個人面接であるが、集団討論が中止となった。受験する側としては、ある意味ラッキーであるかもしれないが、集団討論をすることによって測れるコミュニケーション能力やリーダーシップなどの能力は教育をする上で大事なことだと考えるため、そういった意味では不安であった。試験が1つなくなったということは、合格したとしても、今後は予想以上の努力が必要であり、厳しい道のりであることを覚悟して精進したい。また、模擬授業の試験があり、コロナが流行する前は試験前に大学で友人と練習しようと考えていたが、それができなくなり大変不安な状態であった。

同様に、教育実習の授業の練習も授業を通して行うつもりであったが、大学はオンライン授業となり指導案やワークシートを提出して先生と同級生に添削してもらうという形となった。自分は予定通り実施されたが、6月に実施予定だった実習生は9月に変更になり、中高一貫校で合わせて20名以上の実習生が一度に実習を行うこととなった。

教壇実習の行い方もかなり制限された。近年アクティブラーニングが注目されていて、大学でも生徒が能動的に学習できるような授業づくりを心がけるよう指導されてきた。しかし、グループワークは禁止されており、指名や机間巡視を多くするなど工夫をしたが、結果として単調な授業になってしまったように感じる。国語は特に文章を読むと眠くなってしまふ生徒やつまらないと感じる生徒が多いような印象を持っているため、グループワーク等をして意見交換の場を多く設けて授業に変化をつけたいと考えていたが、全くその考

えを活かせず、授業に関しては消化不良に終わった

昼食の時間の生徒の様子が衝撃的だった。全員、前を向いて食べている間はおしゃべり禁止、クラス全員が食べ終わったら自由に過ごして良いというきまりがあった。当然食べるペースは人それぞれである。つまり、他のクラスは全員食べ終わり自由に遊んでいるのに、自分のクラスはまだ1人食べ終わっていないため遊ぶことができないという状況が往々にしてあった。早く食べ終わっている生徒は休み時間が短くなることが嫌だろうし、食べ終わらない生徒は周りに何も言われなくても多少は責任を感じてしまっているだろうと思われる。コロナ禍では仕方のない対応であるが、生徒の気持ちを考えると悲しく感じた。そのような中でも担任の先生は毎日クラス全体に、時には個人的に声をかけており、そのような生徒のことを常に考えている姿勢に感銘を受けた。

他にも、教育実習生ということもあり親しみやすく感じてくれたのか、生徒から話しかけてもらうことが多かったが、コロナ禍ということで長い時間話すことは控えていた。禁止されてはいなかったが、先生方だけでなく多くの生徒と話すことで何かを感じ考えを深めたいと考えていたので、教育実習全体を通して個人的には不完全な状態で終わってしまったと感じる。

一昨年までは考えもしなかった状況で経験を積み、今も不安な状況が続いている。教員として今年から勤務することになるが、4月にコロナの心配がなくなるとは限らない。つまり、コロナ禍でも生徒や保護者の不安が全てなくなるような学校づくりや授業づくりを心掛けなければならない。また、感染予防だけでなくそれに伴う心のケアも行うべきだと感じる。コロナ禍で採用された私たちは今まで以上の研究と修養が必要であることはいうまでもないだろう。

7. コロナ禍と教育実習 文芸学部国文学科 岡村美佳

コロナ禍での教育実習を臨むにあたって、不安な点は沢山あった。

まず初めに、実施できるのかどうかという点にとても不安があった。今年の教育実習はやらないなどのニュースも耳にして、本当に出来るのだろうか、受け入れてくれるのだろうかという不安。これは今年の教育実習参加学生は全員が思っていたことではないかと思う。幸い、私は後期の参加だったので、日程の変更などもなく、予定通り行うという連絡があったのが夏頃だった。しかし、前期、大学にも通えず、十分な準備、模擬授業などを行うこともできずに、気づいたら11月になっていた。

ただ、後期は、教職の授業は対面で行うことができ、すでに教育実習を終えた同輩の模擬授業を受けたり、話を聞くことができたりしたのはとても心強かった。実習を終えた学生の去年の模擬授業との変化、自信などが目に見えてわかり、自分にも出来るのだろうかという焦りもあった。しかし、大変だけど楽しかったよという近い存在である仲間からの言葉は、自分も早く参加したいという気持ちを強くさせてくれた。

教育実習というものは、全員ができるわけではない、貴重な経験であること。3週間という長い期間学校に受け入れてもらうことはありがたいことであるということ肝に銘じていた。また、私の受け入れ先である母校の中学校では、前期に行うはずだった実習を私が参加する前週までの3週間で行うことになり、仲の良い中学時代の同級生から直近の話を聞くことができたのは、とてもよかったと思う。

初日、とても緊張していたが、3週間が始まったんだというワクワクした気持ちもあった。私が担当したクラスは2年生で、同級生の兄妹も多くいた。中学2年生ってこんなに子どもだったっけという印象も強くあった。1学期はほとんど学校がなかったので、中2とは言えども、まだ1年生感が抜けてないよと指導教官に言われたのをよく覚えている。

やはり、1番コロナを感じたのは、給食の時間である。給食の時間は、一つの大きなランチマットを引いて、班で向かい合って食事をするというのが普通だった。しかし、机を班の形にせず、全員が前を向いて、喋ることも許されないひたすら無言で食べる時間だった。その状況を見て、とても寂しい気持ちになった。班でお喋りしたり、子供らしくおかわりのジャンケンで騒いだりする楽しい給食の姿はなかった。おかわりの時に、生徒たちが当たり前のようにしっかりマスクをつけて、前にいく姿を見て、なんとも言えない気持ちになった。おかわりも先生が配る、一度手に渡ったものは戻してはいけない。アルコール消毒の実施。様々なルールがあったが、生徒はしっかりそれらを守っていた。

合唱祭もマスクをつけたままの実施。普段の授業より、やはり、行事でコロナ禍であることを強く感じさせられた。学校朝会も、放送での実施で、大勢で集まる時間はなかった。私がいる時に偶然にも生徒会の交代で、生徒総会があり、その時に、校庭で初めて全校生徒が集まったということを知った。

また、実習を終えた後、修学旅行が延期になったという話を聞いた。私がいる時に事前学習をしていて、楽しみにしている生徒達の姿、先生も一緒に京都行こうよ～と言ってくれた生徒達のこと考えると、とても悲しい気持ちになった。

コロナ禍での教育実習は、大変なことも沢山あったが、元気な生徒があつてこそその教育の場であるなと強く感じた。最後の学生生活をコロナで存分に楽しむことができなかったが、どんな時代であっても中学校の生徒達の変わらない明るさは、前向きな気持ちにさせてくれた。

もし来年の春にコロナが落ち着いていたら、この子達の卒業式に会いに行きたいと思うくらい生徒たちと過ごした時間は私にとって、有意義すぎる時間であった。

8. コロナ禍における学校 文芸学部国文学科学生

コロナ禍の中での教育実習は、総じて想定外のことが多く起こったように思える。

教壇実習の中で特に困難だったことは、声量の大きさだ。先生方も生徒も感染対策のためにマスクを着用しており、また常に教室の窓や扉を開けて換気を行っていたため声が響きづらい環境に置かれた。そのため、模擬授業で練習していたときの声量では不十分で、特に先生方から指導を受けた部分であった。その中で、声量や声色にメリハリをつけること、アクションを大きく見せることをアドバイスしていただいた。授業の中で特に伝えたいことや大切なことを強調するために、声を張ったり声色を変えたりすること、またこまめに動きをつけることで生徒の注目を引くことにつながると学んだ。

授業スタイルに関してもコロナ禍特有の困難があった。具体的にはグループワークを控えるなど、アクティブラーニングに制限を設けられた。教壇実習の前に想定していた授業計画では、グループワークやペアワークを多く取り入れていた。しかし、感染リスクが高まるという理由で座席を移動するようなワークを実践することができず、授業計画を大きく変更することとなった。他の生徒と身体を動かしながら考えを共有し合う時間が少なくなってしまったことで、生徒が楽しいと感じる授業をつくるのに非常に苦戦した。

学校生活において例年とは異なることとして、感染対策における取り組みを行った。教育実習を実施した学校では、毎日朝のHRで健康観察表を回収していた。健康観察表を忘れた生徒への対応として、朝のHR中に職員室に連れていき検温を行う必要があり、1限の授業準備に時間をかけることができず、せわしく動き回ることになった。また、お昼休みの食事の時間には一方向を向いて無言で食べなければいけないというルールがあった。そのため、生徒が退屈しないように教室のスクリーンに映像を投影したり、座席を移動したり会話をしたりしている生徒がいなく見回りをした。本来ならば、先生方もお昼休みの時間に食事を

したり授業準備を行ったりするそうだが、その時間を割いて見回りをする必要があったため、例年と比べて先生方の負担は大きくなっていると感じた。

行事においても、例年と比べてかなりの変更点があった。文化祭は一般公開をせず、受験を考えている中学3年生と校内の生徒のみでの開催となった。また、感染対策のため、食事の提供や体験型の出し物は禁止されていて、どのクラスも展示のみというルールが定まっていた。これらの条件に対して文化祭へのモチベーションが下がっている生徒が多くいて、教員としてどうサポートしていくべきかかなり悩んだ。文化祭は9月19・20日に開催したのだが、教育実習校では対面での授業が始まったばかりであったということで、クラスの結束が十分には固まっていなかった。そのため、文化祭準備期間も計画通りに進まず、文化祭当日も盛り上がりに欠けていたように思えた。

そして、教育実習生として大変だったと感じたことは、生徒の名前と顔を覚えることだ。生徒全員が常にマスクを着用していたため、生徒の顔をしっかり確認する機会が非常に少なかった。そこで、生徒全員に所属する部活動や趣味などを紙に書いてもらってそれを覚えること、授業外の時間に積極的に話すことに尽力した。その結果、想定していたよりも時間はかかってしまったが、無事に覚えることができた。

教育実習期間の3週間を振り返ってみて、先生方の負担はかなり大きくなっていると身をもって体感した。また、生徒も学校生活における制限が多く設けられてしまっているせいで、学校生活を十分に楽しめていないように感じた。

9. コロナ禍と教育実習 文芸学部国文学科 山崎宏斗

2020年は世界的に見ても大きな転換点となる年となった。その大きな要因として挙げられるのは言うまでもないが、新型コロナウイルスの出現である。新型コロナウイルスは経済に大きな打撃を与えると共に、人々の生活様式にも大きな影響を与えた。これは教育現場においても例外ではなく、学校現場では以前と同じように出来ないことも多くあったと思われる。私はこの未曾有の年に教育実習生として実習を行った。そして現場で目にしたコロナ禍での学校現場と教育実習の実態を自ら体験することができた。

私が実習を行ったのは都立高校である。期間は三週間であった。三週間という期間の中でコロナ以前の实習と大きく異なっていた、と感じられる点は多くあった。今回はその中でも大きく三つの異なる点を挙げていきたいと思う。

一点目は常時マスク着用であったという点である。飛沫が飛ぶのを防ぐために教師、生徒共にマスクの着用は必須であった。常時マスク着用が実習を非常に難しいものにしていただけだと私は感じた。そう感じた理由はマスクが生徒の顔と名前を覚えづらくしていたこと、教壇実習で例年以上に声を張って授業を行う必要があったことが挙げられる。実習生にとって授業を担当する生徒の顔と名前をいち早く覚え、生徒との距離を縮めることは重要である。しかし目元しか認識することが出来ないマスク着用の状況は、それを困難なものとしていた。

また、授業を行う際は教室の後ろまで届く声量を出さなくてはならない。教壇に立ち、授業を行うだけでも最初は一杯一杯であり、声量にまで意識を向けることは想像以上に難しいものであった。しかもマスクを着けていることで例年以上の声量で授業を行わなくては成り立たなかったため、マスクを着用しての授業は難易度が高かったと感じた。加えて生徒の表情を観察しながら授業を進めることもしづらかったため、授業の進行にも多少影響が出ていたと感じる。

二点目はすべての授業が40分授業であったという点である。都内では感染者が多く、時差登校を実施し

ていたことから一授業の時間は40分であった。実習以前から準備は進めていたが、それはあくまでも50分授業を想定してのものであった。50分でさえ目当てを絞り、授業を展開し、進行するのは非常に難しいものである。それを40分授業のサイズに構成しなおし、展開することは大きな壁であった。さらに授業というのは想定外の事態が起きるのが常であり、40分で未熟な実習生が授業を終わりまで導くことは難しかった。私は7クラスの授業を担当していたため授業の進度に差が出来てしまい、担当教官の先生には大変ご迷惑をおかけしてしまったことは大きな心残りである。また生徒を指名し答えてもらうにも時間が限られていたため、生徒が深く考えてくれていたにも関わらず、深く掘り下げることが出来なかった点も非常に残念であった。

三点目は消毒等の今までにはなかった仕事を行う必要があった点である。時差登校にはなっていたものの、教師が登校する時間は30分程度遅くなっただけであった。その理由はコロナ禍において教室の消毒や換気などをこまめに行わなければならない仕事が増えたためであった。実習生として現場にいと分かることであるが、教師は想像以上に仕事が多く忙しい。授業を教える以外にも校務分掌や部活動の指導、授業準備や進路指導など、とても出勤時間内で終えるのは困難であることが見ていて分かった。そんな中で教室の消毒とはいえども、仕事が増えることは教師にとっては大きな負担になると感じた。実習生の私も消毒などの仕事を手伝わせて頂いた。個人的な感想としてコロナウイルスへの不安を抱えながら生徒達と接するという点は、自分にとっては少し負担になっていたと思う。

上記に挙げた点以外にもコロナ禍の以前と以後で変化した点はあると思う。コロナ禍で悪い点ばかりが目立つようにも見えると思うが、良い点もあった。このような状況でも実習生を受け入れて下さった学校に感謝の気持ちを持ち、いつも以上に誠意を持って実習に臨むことが出来た点やコロナ禍でも子どもたちは生き生きとしており、そんな子ども達の笑顔があるからこそ教師は辛いことを乗り越えていけるのが分かった点など、非常に大きな学びが多くあった。コロナ禍でも実習が出来るととても幸運であったと思っている。最後となるがコロナ禍での実習という特殊な経験をどのような形であれ、今後に生かしていければ良いと考えている。

10. 教育実習におけるコロナの影響について 文芸学部国文学科 相楽真子

コロナウイルスの感染拡大における影響によって、教育現場並びに教育実習においても例外的な対応を求められた。母校での教育実習に際し、日程の延期や一ヶ月前の帰省、PCR検査の実施、毎日の体温計測など、実習前から学生の健康状態を確認することが義務づけられた。

5月中旬に開始予定だった教育実習は、10月中旬へと持ち越され、実習開始1週間前になるまで、担当の学年も単元も知らされていない状況だった。こまめに実習校と連絡をとってはいたのだが、休校期間による授業時数の遅れを取り戻すことに迫られていた現場では、例外的な対応を取らざるを得なかったようである。現場の逼迫した状態がありありと感じられた。

無事、実習が始まったが、様々な感染対策や例外的な措置が取られた中でのものだった。実習校では、マスクの着用はもちろんのこと、昇降口に体温測定モニターを設置や、各教室のアルコール消毒液常備化、清掃時の机・椅子の消毒などが念入りに行われている印象を受けた。休み時間には換気を促す校内放送が流れ、昇降口の扉も常に開けたままの状態になっている。学校全体で気を配り、教員、生徒、事務員の感染を防ぐ対応として、体調の報告・管理の徹底を心掛けている様子がうかがえた。

授業面では、講義形式の授業が多いこと、またICT機器を用いた授業の必要性が高まったことも感じら

れた。飛沫感染を防ぐために、グループ学習やディスカッションを自粛する教員と、対話的な学習に ICT を活用することで何とか補おうとする教員とで、ある種二分化が起っていたように思う。指導教員が後者であったため、自身は iPad や電子黒板を用いて授業を行ったが、その使用方法や使用意図について課題が残るものとなった。

国語教育において ICT 機器をどのように用いて生徒の学びに繋げるかについては、教壇実習を行う中で特に意識した部分だった。発問をさせたり、意見を共有したりするのに便利なものではあったし、黒板に記入させることがないから発表を行うにしても時間の短縮になる。だが、板書との兼ね合いや単元によっては使用が難しいこともあった。授業展開を考える上で、なぜここで ICT を使うのか、何を学ばせたいかを熟慮する必要性を改めて感じることとなった。

コロナウイルスの影響は、授業の在り方や質について考え直す契機をももたらした。オンライン授業や課題配布型の授業など、新たな指導の仕方にも注目が集まり、それが推進される傾向も確かにあったからだ。実習校においてもそのことは先に述べた通りで、ICT 機器を用いて授業を行うことが推奨されてはいるが、その用途については未だ確立しているとは言えない。今後、この用途が、学びを得る手段ではなく、推奨が促されることによって目的へと転化することのないよう、気を配っていくべきだろう。

例外的なことの多かった教育実習ではあったが、その分通常の学校教育や授業について目を向け考える良い機会となった。この経験を今後の教員生活に活かしていきたいと思う。

11. 私の教育実習 文芸学部国文学科 伊藤楓希

2020 年度における教育実習は例年のものとは異なった。私が先輩方から聞いていたものとはかなりかけ離れていた。

私の実習先は静岡県にあり、当時静岡県では東京都や神奈川県などの新型コロナが流行している地域との往來の自粛が要請されていた。そこで実習先から実習の始まる 2 週間前に静岡へ帰省することが条件となった。そのため私の教育実習は 2 週間のホテルでの隔離生活から始まった。そして 2 週間の隔離生活が終わり、教育実習が始まった。

まず授業見学を行ったが、そこで行われていた授業は私が受けていた授業や、教職の授業で習ったものとは異なった風景だった。まず、グループワークは行われることはなく、全て個人ワークを中心とする授業だった。もちろん実習担当の先生からもグループワークは行わないように指導された。アクティブラーニングが求められている中、グループワークを行わず、どのように主体的・対話的で深い学びを行えばよいのかでこずった。以前までだったら積極的にグループ学習が行われていたそうだが、今年度はそれができなかった分、工夫が求められ、私にとってはかなりの成長につながった教育実習だった。

また、私、生徒の両方がマスクをしているため声が届きにくい、聞こえにくいという課題もあった。私は大きな声で話せば良いが、生徒はなかなかそのようにいかず、近くへ行き聞くということもなかなかできない中、てこずった。マスクによる困難として授業を行っている際に生徒の表情が見えにくく、リアクションが分かりにくいというものがあつた。そこで私は積極的に生徒に対して発問を行い、少しでもコミュニケーションをとれるようにした。

また、重要な仕事として、手を触れる部分の消毒などが教員の仕事として行われており、私もその仕事を任された。これは今まで行ったことがなく、新型コロナの影響で教員の負担が増えた。自分のクラスだけではなく、階段の手すりなど幅広く行ったため、全ての作業を行うのに、30 分くらい時間を要した。

また部活動においても新型コロナの影響を感じた。例えば、部室の使用が制限されており、生徒は外で着替えをおこなっていた。レスリング部などは接触プレーの練習は原則行うことができず、部活動においてもその影響は大きいものだったと感じた。特に大会などは保護者が応援に行けないなど、生徒や保護者にとっては悔やんでも悔やみきれないものだったと感じた。

以上のように以前の学校現場とは異なり、例年の教育実習とは異なる経験を行った。グループワークが行えないなど様々な課題があったが、振り返ると、とても良い経験だったと感じている。否が応でも工夫する必要があったため様々な文献を読んだり、実際に実践したりすることで、自分の知識や引き出しが増えたと感じている。

また、アクティブラーニングという観点からは、グループワークだけがアクティブラーニングだという自分の偏見が打ち砕かれた。様々な工夫をすることで主体的・対話的で深い学びを実現できることがわかった。

そして、コロナ禍で教育環境は変化したが生徒のために働くという普遍的なことを感じ、自分にとって最高の教育実習だったことは間違いない。

12. コロナ禍での教育実習で学んだこと 文芸学部国文学科 井石奈菜子

コロナ禍の教育実習は、以前に自分が想像していたものとは大きく異なっていた。

まず、これまでのガイダンスにおいて把握していたような事前の準備をすることができなかった。実習校に電話をさせていただき、事前打ち合わせの日程を決めることも、どのような単元を自分が受け持つのかを知ることもできなかった。急遽日程が変更になることが多かったため、より実習校とのやり取りが多く必要であった。

実習中に感じたこととしては、コロナ禍ならではの教師の仕事が増えていた。これは、今までとは大きく異なっていることの一つだ。

職員会議の前に、登校する生徒に検温をしたかを確認し、アルコール消毒を一人ひとりに行った。朝の会では健康観察に加え、検温表に体温・保護者からのサインがあるかの確認を一人ひとり行った。給食のおかわりの配膳は教師が行い、途中で生徒がおかわりしたい場合は、食事を中断し、配膳した。また、給食の際は前を向いて、会話することはできなかったため、生徒とのコミュニケーションの取り方も従来とは異なっていたといえる。

これらの経験から感じたことは、自分で先を見通して行動することの大切さである。

コロナ禍でできることが限られている中で、通常のカリキュラム通りに進めばこの単元を担当するだろうと考え、自分で学習指導案を作り、事前打ち合わせの際に指導教諭に見せた。その際に、書き方や発問の仕方など、気を付けていることを指導していただき、実習中にそれを活かすことができた。コロナ禍で増えた仕事においても、滞りなくできるように、見通しを立てて行動することが求められていたと感じた。生徒の健康観察もより気を配り、体調が悪いと訴える生徒がいた場合は指導教諭にすぐに報告した。何かあった時に対処できるように、自分だけが知っていることがないよう逐一報告し、情報を共有しておくことがより必要になっていた。

生徒とのコミュニケーションは、マスクで表情が完全には見えない状態であり、給食の形式が異なっていたため、より自分から積極的にコミュニケーションを取ろうとする必要があったと感じた。授業と授業の間の時間は、その後に授業を受け持っていなければ必ず教室に行き、昼休みも教室にいるようしていた。それらが、授業が円滑に進める手助けになっていることをだんだんと実感するようになった。

コロナ禍での教育実習の経験は、想像していた従来の教育実習にはなかったことが多く、戸惑うこともあったが、たくさんの学びがあった。この経験をこれから活かしていきたい。

13. コロナ禍の教育実習 文芸学部国文学科 張戸俊寅

五月中旬に予定されていた実習は、十月下旬に延期された。公立学校の教員採用試験が実施されるのは一般的に七、八月頃であるため、私は実地体験をせずに受験することとなった。これを理由に、卒業後の進路の選択肢から教員を外した者も多かれ少なかれいるのではなかろうか。

大学の後期授業が開講されたのは九月中旬であった。授業によっては、遠隔ではなく面接（いわゆる「対面」）、つまり従来通りの方式（とはいっても、もちろん新型コロナウイルスの感染防止対策をより一層強化することは前提）で実施されるものもあった。しかし、十月下旬からの実習を控えていた私は、大学へ通ったり授業に参加したりすることによって新型コロナウイルスに感染してしまうことを危惧して、前期と同様、全ての授業に遠隔で参加することにした（つまり、面接で実施される授業について、実習が始まるまでは遠隔で参加し、実習が終わってからは面接で参加することにした。なお、実習期間中は欠席していた）。ただでさえ実習は延期されているのに、それに参加できないとなると、最悪の場合、教員免許の取得に支障をきたすことになるし、何よりも実習先に新型コロナウイルスを持ち込んでしまうことがあってはならなかった。

実習が始まる二週間前から実習が終わるまでは、毎朝検温し、その結果を用紙に記入していた。実習が始まると、その用紙を出勤する度に実習先へと提出した。これは、別に実習生に限ったことではなく、全ての教職員と生徒が行うべきことであった。毎日のように校門をくぐる彼らにとって、検温を含む健康観察を行うことはもはや常識となっていた。

学校内では、皆必ずマスクを着用しなければならなかった。ちなみに私は、教壇実習時に限ってマスクの代わりにフェイスシールドを使用することがあった。口の動きや顔の表情が見えなければ、授業を効果的に行うのは難しいと考えたためである。生徒の顔が見られるのは給食の弁当を食べているときだけであった。その間はマスクを外せたが、無論、その間に会話してはならず、生徒は皆、教室の自席に着いたまま同じ方向を向いて無言で食べていた。その光景は、実習先が母校である私からして異様であると思わざるを得なかった。私が中学生だった頃は、全校生徒が一堂に会していたし、遠く離れた友達と話したり声が大きかったりすると注意されることはあっても、自由に会話は楽しめていた。それと比べると随分様変わりしていたが、コロナ禍においては致し方無いと思われた。

授業中であっても教室のドアは常に開放されていたし、窓を閉め切ることもしなかった。休み時間には換気を、給食の前や休み時間の後には手洗いをするように教員は呼びかけていたし、教室には咳エチケットについての掲示があった。

このように、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐにあたって効果的とされている「マスクの着用」や「手洗い・咳エチケット」、「相手と身体的距離を確保すること」、「三密（密集・密接・密閉）の回避」等は、積極的に行われていたものの、やはり学校という特殊な環境下でそれらを徹底するのは困難なようであった。ここでは詳らかにできないが、取り立てて言えば、生徒同士に身体的距離を確保させることや「密集・密接」を回避させることは不可能に近かった。その要因には実習先の特性が大いに関係しているが、これもここでは明らかにできない。とはいえ、それらが不可能であることは実習先に限ったことではないはずで、そもそも学校で生活していると、自分と生徒との距離には気をつけても、生徒同士の距離には気が回らないし、生徒が密集・密接していても和気あいあいとした様子であるから気にならない、というのが本当である。加え

て、生徒たちは新型コロナウイルスの感染拡大によって既に様々な不利益を被っているし（特に、学校にさえ通えない期間があったことを忘れてはならない。）、きっとこれからも大なり小なり被るであろうから、いちいちそういったことを指摘するのが必ずしも正しいとは思わない。学校における「感染防止対策と生徒の心のケアの両立」は、社会における「感染防止対策と社会経済活動の両立」と同様に追求されるべきものであろう。

今年度の実習は、まさしく渦中に飛び込むようなことであった。正直、あの実習先の状況下で今まで感染者が出ていないのは奇跡に近いと思う。一方で、そう思えるほどの学校生活を生徒が取り戻しつつあるのは嬉しいとも思う。コロナ禍で学校を運営していくには、新型コロナウイルスの感染防止対策を徹底しながらも、「これで感染者が出しまったら、それはもう仕様が無い。」と割り切る必要がある（あくまで私の見解であり、実習先でそのような言動があったわけでは決してない。）。実習という短期間でもそう思うに至ったのだから、実際に勤務されている方々はなおさらのことではなかろうか。

14. コロナ禍と教育実習 文芸学部英文学科 鈴木健太

今年度の教育実習は、私たち教職課程を履修している者にとって記憶に残るものであったに違いない。私の教育実習は本来であれば6月に行われるはずであった。しかし緊急事態宣言の発令などにより延期となってしまった。その時、今年度実習を実施することができるのかと不安を抱いた。先の見えない世の中の状況、また自分進路活動にも影響が及び、昨年の春頃は本当に体も心も落ち着かない日々が続いた。それでも前を向いて進むしかないと思い、辛抱強く固い意志を持ち続けてきた。そして緊急事態宣言解除後の5月頃に実習の日程が決定したとの連絡を実習校から頂いた。実習を行えるということを知り、私は安堵の気持ちと共に実習を行わせていただくことを許可してくれた母校の先生方への感謝の気持ちも溢れた。その後は自分の進路活動、卒業論文の執筆、そして実習への準備を並行して行いながら日々生活していった。今振り返ると本当に昨年の春から夏にかけて目まぐるしい日々が続いたなと感じる。毎日が忙しくあまり思い出したくない日々でもある。

その後、いろいろと個人的な活動が落ち着いた秋に教育実習が始まった。実習の期間は10月26日（月）～11月13日（金）の3週間で母校にて行った。実習中はほぼ例年の実習と同じように活動ができたと思う。マスクの装着やあまり密な活動ができないなどの多少の制限があったが、それ以外は不自由なく活動することができた。ただやはりマスクにより生徒の顔がよく見えないこともあったので、名前と顔を一致させることに苦労した。日頃から生徒とコミュニケーションを多くとることを意識し活動していった。日程が進むごとに生徒から話しかけてくれる回数も増え実習での充実度また教師という仕事のやりがいも感じた。そして私の指導教諭は高校時代からお世話になった先生で、実習中もとても熱心にそして親身になって私に接してくださった。ホームルームクラスの生徒との接し方や授業のやり方など、私が悩んでいることに対してたくさんアドバイスをしていただき、私の実習がよりよいものになるよう手を差し伸べてくださった。このように全てが充実しているなと感じながら実習最終日を迎えた。

最終日には研究授業があり実習の集大成を披露する場となった。私の研究授業には30名ほどの先生方が来てくださった。また生徒たちもいつも以上に私の授業に入り込んでくれて、良い授業を生徒と共に作り上げることができたと思う。授業後には多くの先生からアドバイスをいただき、自分では気づかないポイントなどの指摘をいただいた。そこで改めて教師の仕事の難しさを実感した。実習を通して、私に関わってくださった全ての方々にとっても助けられてきた日々だったと感じる。特に指導教諭、生徒たちにはとても感謝を

している。3週間で一番多く関わり、より多くのコミュニケーションを取ってきた。会話をすることで自分が励まされてきた。社会はコロナ禍であるが、学校生活は生徒と先生が何不自由なく生活できるように守られていくべきかけがえのないものだと感じた。実習の時期やその他の多少の制限はあったが、教職課程最大の課題である教育実習を行うことができ、本当に達成感の気持ちでいっぱいだった。実習を行わせてくださった母校、また実習中に私に関わってくださった指導教諭、生徒、その他の先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。また4年間大学の教職課程において関わってくださった教授をはじめとする関係者の方々にも感謝している。

15. 新型コロナウイルスの状況下での教育実習 文芸学部文化史学科 小林浩太郎

2020年での教育実習において、新型コロナウイルスによる影響はとても大きいものであった。私の教育実習を行う母校では、教育実習を5月の半ばごろに予定していた。しかし、新型コロナウイルスの影響により緊急事態宣言が出されたことで、教育実習は延期となり、いつ行うことができるかわからない状況が続いた。実際に教育実習の日程が決まったのは9月であり、10月19日から3週間行うことができることになった。しかし、新型コロナウイルスの第二波が迫っていたこともあり、3週間という期間を2週間に短縮してほしいと要求され、大学へ何度も問い合わせの連絡をした。結果的に毎日の検温とマスクの着用、生徒との過度な接触を避けるといった内容で教育実習は許可され、教育実習を3週間行うことができた。

教育実習で苦勞したこととして、生徒との交流が制限されていることと授業において生徒に話させる行為が禁止されていることがあった。生徒との会話も極力避けるよう言われていたこともあり、昼休憩で一緒に食事を行うことや掃除中の会話があまりできなかった。授業においても教科書を読ませることや生徒への発問、生徒同士で行うグループワークも極力しないよう指示を受けていたことから、思い描いていた授業が展開できなかった。校内にいる人は全員マスク着用が義務付けられており、しっかりと生徒の顔を見る機会がなくなりさみしさを感じた。

しかし、新型コロナウイルスの状況において、パソコンを用いたパワーポイントやグループワークで時間を使わない分、板書と自身の話で生徒に理解させる教える力を向上させることができた。説明する際、パワーポイントを利用した場合にはスライドの内容を読む形になりやすいのに対して、板書で授業するためには教える知識を頭で整理し、わかりやすく話せるまで定着させないといけない。こうした厳しい状況の中に身を置くことで教える力を鍛えることができた。また、部活動において新型コロナウイルスより以前の普段通りの練習が行われており、参加して生徒と交流することができた。練習でもマスクの着用、アルコール除菌、練習時間の短縮、ソーシャルディスタンスを意識して一定の距離を確保するといった試みはされていた。

教育実習を通じて、新型コロナウイルスによる多くのアクシデントやそれによる影響は大きなものであった。5月を予定していたこともあり、教材研究や就職活動の日程の調整など計画がずれてしまうことが一番の要因であったと思う。しかし、教育実習を通じてこの状況下で教員がそれぞれ工夫し、生徒のためによりよい授業ができるか試行し実践している様子を目の当たりにすることができたことは、本当に良かったことだと思う。工夫の一つ一つに生徒への愛情を感じ、これからの教育を考えさせられた。人間同士の会話や接触が難しくなる中で、生徒により良い授業や環境づくりができるかが今後の課題であり、この挑戦がより良い授業を作り上げていくものだと考えられる。新型コロナウイルスの状況の中で教育実習が無事に行うことができ本当に良かったと思う。

16. コロナ禍と教育実習 文芸学部ヨーロッパ文化学科 中ノ森須美玲

以下では、コロナ禍での教育実習についての詳細を述べていきたい。

日本で新型コロナウイルスが確認されてから現在まで約1年が経過した。新型コロナウイルスが某クルーズ船で発生した後、ニュースや新聞など多くのメディアで取り上げられたが、その頃、新型コロナウイルスの実態は不明であり、当時の私達の日常に特に変化はなかった。しかし、クルーズ船の乗客が下船したといった報道があった直後、次第に感染拡大していったことを今でも覚えている。未知のウイルスを防ぐため、いつの間にかどこへ行くにも皆マスクをするようになっていた。そして、2月に入ると会社説明会やイベント等はすべて立て続けに中止になり、遂に教育実習が行われるはずの1ヶ月前に教育実習を延期するとの連絡が学校から来た。突然の出来事であったが、その半日後、感染拡大を防ぐため全国に緊急事態宣言が発令された。そのため、本来、教育実習が行われていたはずの5月には自宅待機で、大学の授業も緊急事態宣言が開けるまでなかった。

5月半ばになると、ようやく大学の授業がオンライン上で始まり、そこで初めて教職の仲間と現状を共有することが出来た。教育実習の日程は、早くて8月から始まる人もいたが大方10月から始まる人が多かった。9月になり、実習を終えた仲間からの実習報告を聞くことが出来た。非常に充実した時間だったと楽しそうに報告する仲間の様子を見て、私自身も早く教育実習に参加したいという思いと同時に、実習がうまくいくのかという不安と緊張感が増した。更に、授業とは別に教育実習を行う学生に向けての説明会や講義がオンライン上で開催されるようになり、オンライン上でのメッセージ機能を通して、今後教育実習に向かう者同士で実習に不安を感じていることを改めて共有しあった。具体的には、教育実習の範囲や実習先の担当学年がまだ決定していない不安、新型コロナウイルスの影響で進度が遅れ、先生方や生徒側も切羽詰まっている状況で実習に行くことに対し懸念しているなど教育実習が本当に実施されるのかさえも分からず、先行きが不透明であった。私自身も具体的な詳細について不明であったため不安は尽きず、一途に新型コロナウイルスが収束することを願うしかなかった。

そして、願いが成就したのか10月には新型コロナウイルスが一時的に収束した。それから、実習先の担当教員と大まかな教科の範囲と授業開始日時を決定することができ、更には具体的な詳細についても、実際に会って話し合うことも出来た。

教育実習は無事始まったものの、元来とは異なる点があった。それは、実習生徒の待機場所から座席の配置、昼食時間も会話を控えるようにすること、最後に受験生である高校3年生の教室には行かないことであった。それ以外は、特に変化はなく、朝の朝礼を始め朝のHRから授業見学、実施、帰りのHR、掃除まで参加することが出来た。私が実習に参加させていただいた時期も10月で担当学年も高校2年生であったことから行事やテストが多く、特にテストは3週間という短い間に2度もテストが実施された。そのため、担当クラスの生徒との関わりは朝と帰りのHRしかなく、最初は生徒と会話する時間が少なかった。しかし、生徒に自己紹介カードを書いてもらい、副教科の授業に参加するなど積極的に生徒との交流を増やすことで親交を深めることが出来た。

これまで、教育実習が始まるまでの経緯について詳しく見ていったが、新型コロナウイルスにより教育実習期間も延期される異例の出来事が起こった。最初は、不安に苛まれることもあったが、実習先の協力や大学の教職の仲間、先生方の支えの元、無事に教育実習を終えることができた。今回経験した教育実習は、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前のことではなかったことを再認識できた非常に貴重な経験となった。

17. コロナ禍と教育実習 文芸学部ヨーロッパ文化学科 川島要

私の教育実習はもともと前期の5月に行われる予定であったが、コロナ禍における状況で後期の10月に延期された。事前の説明会においても、例年よりも授業数が少なくなる可能性や、担当教諭のコロナ対応から十分な対応ができない可能性などの説明があった。私の場合、高校の世界史を実習科目としており、実習が延期される前から担当教諭と連絡を取り合っていたため、柔軟に応じることができた。実習が始まる1か月前には担当する単元は4単元分で、5クラス分持つということを教えていただき、そのための準備を入念にこなした。具体的には4単元分の授業プリントと指導計画案を作成し、担当教諭に添削していただいた。社会科の場合は計画通り進むことの方が多いため、担当範囲が変更される可能性は少ない。しかし、コロナ禍の状況が変化する中で何があるかわからないため、前後2単元分は教材研究をし、対応できるように準備した。

加えて教育実習が行われるまでの1ヵ月間は毎日体温を測り、体調管理表に記入することとなった。もちろん実習中も毎日体温を測り表に記入していた。教育実習に限らず、普段から体調管理には気を付けるべきである。実際、私が実習を行う1週間ほど前に、他学校の教育実習生がコロナになり学校が休校対応になった事例や、実習をしたくないあまり、コロナで陽性でしたと虚偽の連絡をしたという報道もあった。教育実習はもちろん自己の成長のため・教員免許獲得のためでもあるが、対応していただいている学校に多大な迷惑をおかけしてしまっているなかで、教育実習を我々を行うこととなる。病気にかかってしまうことはどうしようもないことではあるが、体調管理を万全にし、できる限りご迷惑をおかけしないよう、何事にも注意して日頃行動する必要がある。

次に、実際に教育実習が始まってからの状況を述べる。実習生が注意しなければならなかったのは、グループワークである。私の高校は1クラス40名おり、そもそも人数が多いなかでグループワークを行うのは、コロナ禍の観点からもできる限り控えてほしいという連絡があった。そのため、個人的に問いの答えを聞いたり、2人組で軽く話し合う時間を設けたりすることで工夫した。また、その学校では2020年4月からの緊急事態宣言によって一定期間学校で授業ができないタイミングがあった。加えて9月までは授業時間も通常の50分ではなく40分授業であった。そのため若干授業計画が押しており、例年よりもあまり進んでいない状況であった。そのためこれ以上授業進度が遅れないよう、必ずこの4単元分は進めなくてはならず、どうしても早く進めなければならないというプレッシャーがあった。しかし、授業が進むにつれて少しずつ良い意味で余裕が生まれてきて、スムーズに授業を進めることができたといえる。

学校生徒の状況は、普段なら昼食を共にしてコミュニケーションを取りたいところではあるが、コロナ禍の状況でそれをするのは少し気が引ける部分があった。放課後に生徒と軽くコミュニケーションを取ることでもできたものの、実習2週間目に中間テストがあった状況から、放課後はみな勉強をしており、あまり話かけられる状況にはなかった。最終日にそのことで生徒に相談したが、生徒も同じことを思っていたようだ。普段であれば実習中に定期テストは入ってこないようだが、実習日程が変更されてしまった以上どうしようもない。この工夫としては、コミュニケーションの方法は対話だけではなく、紙や冊子といったものでも交流できる。例えば自己紹介カードを生徒に書いてもらって返信するという手段もあるため、ぜひそういった工夫を組み合わせ対応してもらいたい。しかし、反対に自分の時間をしっかり確保することができたため、教材研究をさらに深めたり、担当教諭と相談して4単元分の小テストを作成したりと有意義な時間を過ごすことができた。

以上コロナ禍における教育実習の状況を述べた。この状況において学生側はもちろん、大学側・対応する

学校側も非常に頭を抱えることではある。しかし、こういった状況だからこそ学べる部分も非常に多かった。ぜひマイナスに捉えず、プラスに考え、自分にできることをいろいろ実践してもらいたい。また、何よりも大事なのはコロナ禍で対応していただいている学校の先生方・生徒方・関係者の皆さまに感謝の気持ちを忘れないことだ。多くのことを吸収し、感謝の気持ちをもって有意義な教育実習を過ごしていただきたい。

18. コロナ禍と教育実習 法学部法律学科 奥村奈生

今年の教育実習はコロナ禍で行われて、例年行われている6月から延期されるなど想像もしていなかった。実習校が実習をしないという判断をした場合、教育実習をしないで代替案として大学の単位で認めるという事を文部科学省が発表するなど、実習前からどうなるか不安な事が多かったが、私の実習校は無事9月から受け入れてくださり、実習を行う事が出来た。

基本は8時40分登校だった生徒も分散登校が行われていたので、実習生も例年とは違った朝のルーティーンになった。一番早いスクールバスで学校に行き準備するのが一般的だったらしいが、私たちもスクールバスに密にならないように、生徒よりは早い時間だが、例年よりは遅いスクールバスにしてあると実習担当の先生に言われた。

コロナ禍ならではの仕事もあった。毎朝体温を測ってオンラインで先生に提出するという事をやっていたのだが、やはりクラスに何人かは毎朝忘れてしまっている子がいたので、その子に対する指導も行った。また、いつもならお昼の時間は友達と騒ぎながら楽しいお弁当の時間のはずだが、コロナ禍なので前を見て話さずに食べるように、毎日生徒がDVDを持ってきてそれを見るという事をやっているクラスがあった。そのクラスで、ある日にお昼に担任の先生に、会議があるからDVDを見られる機械を持って行ってほしいということをお願いしたが、教科担当の先生との話し合いの時間が長引いてしまい機械を持っていくのが遅くなってしまった。担当の先生は、きちんと生徒に謝ったのなら問題ないと言ってくれたが、やるべきことが多いときはきちんと自分がその時間に何をやっているのか把握し、もし頼まれたら無理な事はせず、きちんとこの時間は他にやらないといけない事があると早い段階で伝えるべきであるという事を改めて学んだ。

担当の先生からは、自ら思ったことなどをどんどん生徒に伝えてほしいという指導を受けていた。生徒たちはマスクをせずお話をしながらお弁当を食べてしまっている姿が見受けられたので、それをやめさせる指導も教育実習生として行っていこうと自主的に思うことが出来たきっかけになった。

また、コロナ禍で休校が続いていた事で不登校のようなものになってしまった生徒もいたようだ。担当の先生は登校拒否と言っていたが、その子は帰りのHRに来たり、1週間に一度ぐらい登校していたりしたので、教職実践演習で学んだ不登校の概念には当てはまっていなかったため、ここでは不登校のようなものと記しBとする。

Bは元々他の中学校で不登校気味になり、転校してこの学校に来た生徒で、休校期間に入る前は普通に通っていたそうだが、休校明けから不登校のようなものになってしまったそうだ。担当の先生からは、その事は触れずに話してほしいという事を言われていたので、最初はどのような風に接すればよいのか悩んだ。私が他の子と趣味の話をしているときにBが私も好きなんですと声をかけてくれた。その時に感じたのは、教員という仕事は先入観にとらわれず様々な事に興味を持つという事である。そうすると生徒が興味あることで話をしてくれて私も乗ることが出来る。そこからコミュニケーションが取りづらいう生徒ともコミュニケーションをとるきっかけになることがあるという事を感じる事が出来た。

今回の教育実習はコロナ禍の影響で様々な変更点があったりして、大変な事も多かったが、コロナ禍だけ

らこそその生徒の心の変化を知ることが出来た。変更点を学びのきっかけと捉えて前向きに考えられる教師になりたいと感じたコロナ禍での教育実習になった。

19. コロナ禍教育実習一期生 法学部法律学科 東海林正晃

2020年1月、テレビの全チャンネルがある一隻の船を映していた。ダイヤモンド・プリンセス号という大きな船だ。あの時、今現在の世界の状況を予想できた者はいたのだろうか。まもなくして新型コロナウイルスという100年に一度のウイルスが日本だけでなく、世界中を襲った。私は2月の中旬に映画館のアルバイトを辞めることを決意した。元々最後の学生生活1年間は自由に時間を使いたいと考えていたこともあったが、当時の政府の対応を見れば感染が広がることは概ね予想できた。面倒には巻き込まれなくなかったため、新型コロナウイルスの感染の拡大のニュースを見て、すぐに決断した。そうして春を迎えて、すぐに緊急事態宣言が発令された。おそらく教職課程を履修している学生全員の頭によぎったことであろう。「教育実習ってどうなるの？」

結局6月に予定されていた実習は9月に延期となった。通常時でもパンクしそうなぐらい多忙である学校で、感染対策をしながら、休校の分を取り返さなくてはいけないという想像を絶する環境の中、実習を受け入れてくださることを決断してくださった母校には本当に感謝の気持ちでいっぱいである。私はステイホームの期間を利用して、より入念に実習の準備を行い、本番に臨んだ。そうして始まった実習で感じたことを以下で述べていくこととする。

どうしても自分の高校時代と重ねながら日々を過ごすことは避けられず、様々なことを思い返しながら生徒とコミュニケーションをとっていると、衝撃の出来事があった。とあるきっかけである男子生徒に同じクラスの女子生徒の名前を尋ねたら、「女子の名前ほとんどわからないです。」と返ってきた。驚きを隠せなかった。今思うとそれもそのはずで、6月に学校が始まってからしばらくは分散登校が続き、もちろん行事は全て中止。その後すぐに夏休みを挟んで二学期が始まったところである。自分が同じような状況でもクラスメイトの顔と名前を覚えるのは無理だろうと思う。コロナ禍ということも相まって、教員と生徒だけでなく、生徒同士のコミュニケーションも足りていないのだなと感じた出来事であった。

そして、これは予想できたことであったが、やはり授業形態は制限された。アクティブラーニングを重要視する昨今の授業作りの流れであるが、机を動かした対面でのグループワークなどはできるだけ控えるようにという指示があり、少し苦勞した。科目が日本史Aということもあったが、どうしても講義に近い授業になってしまい、初めのうちはかなり悩まされた。それでも発問を工夫して生徒に考えてもらう時間を増やすなど、担当教員とも相談しながら指導案を改善していった。

実際に3週間を教員として学校で過ごすことで、本当にたくさんのことを学べた。そして、何より世界中の誰も正解がわからないこのような事態になっても動じずに、生徒のことを第一に考え働いている先生方には本当に頭が上がりなかった。日々の授業だけでなく、あらゆる面で生徒に寄り添っている姿は、環境は違えど、どのような職種にも必要なことだと痛感した。実習の最後の日には、生徒からサプライズで色紙をもらうなど、本当に大変な3週間だったが、同時に大学生活の中で最も充実した3週間になった。

コロナ禍で実習をした初めての学年ということプラスに捉え、どんな事態にも対応することができるという自信を持って、次のステップでも頑張っていきたい。

第二節 コロナ禍の教育と大学生活

ここでは、実習先である中学校や高等学校とは異なり、コロナ禍で急速にオンライン化が進んだ今年度の大学の授業を、受講生たちが学習者としてどのように経験したのか、彼ら／彼女らはそこにどのような可能性と困難を見出したのかを辿っていくこととしたい。

1. コロナ禍の教育と大学生活 文芸学部国文学科学生

大学生活はコロナウイルスの影響を受けなかった。前期は就職活動に専念したかったため、授業を卒業必要最低限しか履修しなかった。とは言っても教職課程に必要な単位が足りていなかったため、英語の授業と法学の授業はオンラインで参加した。国文学科の授業は、教授がオンラインツールに不慣れということもあり、授業を行わず、課題提出となった。

どの授業も本質としてコロナ禍の前ととりわけ変わった印象はなかった。が、自分の授業を受ける姿勢は変わった。オンラインということもあり、友人との連携が取りにくくなった。法学も英語も友人と受けていたが、対面と異なり隣にいるわけではない。対面の時はわからないところを友人に聞けるなどお互い助け合っ

て受けていたが、オンラインになると聞こうにもラグが生じて聞けなかった。この点は痛いところもあったが、逆に自分は集中して鞭打って受けることができた。

自宅で授業を受けていたことも効果があった。実家、親のいるところで受けていた。対面の授業では、居眠りや携帯をいじってしまうこともついある。しかし、実家で受けていると、自分の場合、親と一緒に住んでいたため、小学校の時の授業参観みたいな緊張感が走ってくる。別に見張りが来るわけではないが、大学の授業料の出資者である親の前で下手な行動は取れないため、かつてあった意識を取り戻せるいい機会だった。

国文学科の授業は、人の顔を見ないで毎週の課題を提出するだけで、法学や英語ほど気を引き締める必要はなかった。ただ、書道の授業だけは毎回の課題をポストに投函しなければいけなく、出不精の自分には少しきつかった。ただこの課題が毎週金曜日提出であり、ずっと自宅にいても曜日感覚はずれなかった。

テストの代わりに課題が多いなどと言っている友人もいたが、自分は課題の大変さは変わらなかった。大学生は本来学ばせていただく立場であるのに、いつの間にか授業よりアルバイト、部活・サークルと、社会人の予備軍のような扱いになってしまった風潮がある。今回のオンライン授業で、このような風潮が少しでも解消されて本来の領分が取り戻せたのなら、教育体制にはプラスに働いたはずである。

一つ不自由を申したいが、図書館の入場制限が少し痛手だった。卒業論文の執筆に資料が必要だったが、その場で読めない。一度借りて、必要なところをコピー、メモなどをまた違う場所で行う。非効率的で、荷物が多い時は工夫しなければならなかった。大学の図書館はまだ良かったが、国会図書館は完全予約制で最速で二週間かかる。その二週間のできることを考え行動をしていたため計画性は上がったが、効率は下がった。最終的に国会図書館はあまり使わず、都立図書館を利用した。都立図書館は予約不要で、学習スペースも蔵書数も充実していた。後輩たちには国会図書館が使えなくなった場合の代替措置として勧めたい。ただ、都外在住の自分には少しアクセスが悪かった。やはり自由に学習できる環境を戻して欲しい。

2. オンライン授業について 文芸学部国文学科 茂呂佳亮

今年度は新型コロナウイルスの影響で、大学の授業がオンラインでおこなわれたことが、自分にはとても印象的だった。一口にオンラインと言っても、形態は様々であった。例えば、Zoomを使った授業(双方向型)、Web Classを使った授業(オンデマンド型)などである。それらを受講していく中で、対面授業と比較してみても、異なる点やメリット・デメリットが見受けられた。

まず、オンライン授業のメリットを三つ挙げたい。一つ目に、授業を見返しやすいことが挙げられる。対面授業であれば、一度聞き逃してしまったり、理解できなかつたりしたことをうまく消化しなければ、授業についていけなくなることも考えられるが、Web Classの授業(オンデマンド型)であれば、資料や授業の内容をある程度の期間載せているものが多く、自分がイマイチ理解できなかった箇所を何度も理解するまで読み込んだことは、授業への理解を深める上で非常にプラスだったと思う。

二つ目に、通学に時間をかけなくて良いことが挙げられる。本来の対面授業であれば、通学に時間を割かねばならず、人によっては往復で数時間かかることもある。また、出かける準備も要らないので、一日に自由に使える時間が増えた学生がほとんどなのではないだろうか。自分は、その空いた時間を読書や次の授業の復習にあてるなどに使ったので、使える時間が増えたことは非常にありがたかった。

三つ目に、電子機器の扱い方に慣れることができるということが挙げられる。対面授業であれば、講義を聞いて紙にペンで書き込んでいくものが多いが、オンライン授業は様々なアプリケーションを使うことになるので、必然的にそれらを使いこなす必要があり、電子機器を扱えることは、社会に出てからアドバンテージになり得ることである。したがって、オンライン授業は、学生のうちから電子機器に慣れる良い機会といえるのではないだろうか。

今度は、デメリットを二つ挙げたい。一つ目に、インターネットの通信環境や端末のスペックによって、授業を快適に受けられない可能性があるということが挙げられる。一方、対面授業であれば、出席さえすれば、平等な環境で授業を受けることができる。人によっては通信環境のせいで学習に支障が出てしまうことはデメリットと言えるのではないだろうか。二つ目に、健康面への不安が挙げられる。座りっぱなしでいると、運動不足になったり、長時間電子機器の画面を見ていると視力が低下したりすることも起こり得るだろう。

以上のことが、オンライン授業のメリット・デメリットであると考えている。前期は一律でオンライン授業であったが、後期は対面で行われた授業もあった。今後、今年度の後期のように対面授業とオンライン授業を使い分けることが一般的になる可能性もあると考えている。自分が教員になった際には、オンライン授業のメリット・デメリットを考慮しつつ、対面であろうとオンライン形式であろうと生徒の力がつくように尽力したい。

3. コロナ禍の教育と大学生活 文芸学部英文学科 佐藤愛実

新型コロナウイルスの感染拡大によってほとんどの大学がオンライン授業となり、多くの学生が例年とは異なる経験をたくさんしてきただろう。私自身も、この1年、学業の他に就職活動、教育実習、卒業論文など大学4年生だからこそできる経験もたくさんしてきた。新しい日々を手探りで進む中、私が経験したことや感じたこと、そこから学んだことなどを記していく。

まずはコロナ禍で私が感じた大学生活の変化についてである。新学期が近づく3月、今年から4年生になった私は、就職活動を終えたら、残りの学生生活を楽しもうと思っていた。しかし、新型コロナウイルスにより4月から始まるはずの前期は5月からの開始で全面オンライン授業になり、そこからは学校生活の全てが変

わってしまった。

基本的に大学には立ち入り禁止だったので、授業は全て自宅で受けていた。私はもともと大学のために東京に上京してきたので、一人暮らしをしていた。しかし2月と3月は春休み期間であったこととコロナウイルスが流行り始めていたということもあり、4月に緊急事態宣言が出される前にはすでに帰省をしていた。その際、万が一のことも考え、授業に必要な書類や機材などを持って帰っていた。授業が始まってからは、ネット回線のトラブルに苦戦していた。これは私たち学生が解決できるものではないので、毎回きちんと繋がり何事もなく終わることができるよう祈りながら授業を受けていた。日々試行錯誤しながら受けているうちに前期はあっという間に終わってしまった。

夏休みに入ってすぐ感じたことは、前期に授業はきちんと受けていたはずなのに、授業を受けた気がしなかったということである。やはり大学に行って先生や受講生と直接コミュニケーションをとらないと物足りないと感じた。後期からは対面での授業とオンラインでの授業ができるようになった。私は対面での授業があったので、東京へ戻り一人暮らしの生活を始めた。前期に比べるとオンライン授業にも慣れ、実際に友達とも会えたので本来の大学生活の楽しさを少し感じる事ができた。以上が全体的な今年の流れである。

ここで、私が実際に感じたリモート授業におけるメリットとデメリットを述べようと思う。まずメリットは大きく分けて3つある。一つ目は、どこでも好きな場所で受けられるということである。万が一、寝坊してしまったり、電車が運休して学校に行けなくなってしまったりしたら欠席するしかなかったが、リモートだと携帯さえあればその場で参加することができる。中には気分転換にカフェで授業を受けている人もいた。

二つ目は、授業の記録が残ることである。対面の場合は、先生が言った言葉を聞き逃してしまったり、書くスピードが追い付かなかったりしても先に進むしかない。しかし、リモートの場合は、録音されているので何度も繰り返し確認することができる。また、その日の授業を欠席しても後で受けることが可能だったので、授業についていけなくなる心配もなかった。

三つ目は、就職活動との両立がしやすいことである。従来であれば授業がある日にインターンや採用試験がかぶってしまうと、それが終わったとしても、移動時間が足りなく授業に間に合わないという先輩方がたくさんいた。しかし、今年はカフェで受ける人や移動中でも授業に参加している人がいて、私が所属しているゼミナールでは今までで一番4年生の出席率が高かったそうだ。移動中でさえも授業に出席することができるのは、リモートならではのメリットだ。

一方で、デメリットは主に4つである。まず一つ目は、一人暮らしをしている人には辛いということである。私が一人暮らし中はWi-Fiに制限があったので、授業も課題も就職活動もすべてオンラインでやらないといけなかったのはとても大変だった。何度も制限がかかってしまい繋がりにくくなったり、自粛中の唯一の娯楽（携帯を使用すること）もできなくなってしまったりしたのはとても辛かった。また、孤独との闘いでもあった。家から一歩も外に出られない状況で一日中パソコンを使用していたため、Wi-Fiの制限がかかり、家族や友人と電話することもできなくなってしまいとても苦痛だった。

二つ目は、画面の見過ぎで目がおかしくなったり頭や首、背中が痛くなったりすることである。授業だけでなく課題も就職活動もパソコンを使用していたので、定期的に体を動かさなければいけないと感じた。

三つ目は、印刷物についてである。印刷しないと見えにくい課題や大量の印刷が必要な授業があったので印刷にかかる費用がとても高かった。一人暮らしをしている人はプリンターを持っていない人が多いのでとても大変だったと思う。四つ目は、卒論研究が思うようにできないことである。最初は大学に行くことがで

きなかったので、図書館で参考文献を借りることができなかった。郵送制度が始まって、英語の文献は一度読んでみないとその本が必要かわからず、送料も学生負担だったため気軽に利用することができなかった。このように、リモート授業にはメリットもデメリットもあるが、できる範囲で上手くやれるかどうかは自分次第だと思う。

最後に、コロナ禍での経験を振り返って感じたことを述べようと思う。まずこの1年を通して、大学において学ぶ目的や姿勢を見つめ直すいい機会になった人が多いのではないと思う。オンライン授業というのは、サボろうと思えばいくらでもサボれる環境である。ログインしなければ簡単に授業を欠席できてしまうので、閉ざされた毎日が嫌になり休もうと思った学生は多いと思う。しかし、画面越しだからこそグループワークではしっかりと対話し、グループメンバーとコミュニケーションを取らないといけない。画面越しでは伝わりにくいからこそ、分からないことがあるならはっきりと授業内で質問しないとけないのである。今までなんとなく授業を受け、バイトをして遊ぶ。周りと同じような大学生らしい生活を送ることに満足し、大学での学びに対しては常に「受け身」だったと話す友達もいた。この1年、学生最後の学校生活がこんなことになってしまい、思い描いていたものとは全く違うものになってしまった。しかし、みなが同じ状況にいるからこそ、置かれた状況をプラスにするしかないと思う。まだ学生生活が残っている人は学校生活についてもっと積極的になり、自分自身の未来のためにぜひ徳を積む日々を送ってほしい。

4. 非日常を日常へ 非日常の1年から学んだこと 文芸学部英文学科 丹羽彩夏

2020年、それは、今までの当たり前が当たり前で無くなった年であった。新型コロナウイルスが世界中で大流行し、ニューノーマルな生活を余儀なくされたからである。私にとっては、大学生活における最後の年であったこの1年間をどのように過ごし、どのように感じたか、何を学んだのかを、大学の授業と課外活動の2点に焦点を当てて書いていきたい。

まず、授業においては、政府による緊急事態宣言の発令より前期は例年より2か月くらい遅く始まった。緊急事態宣言が解除され、学校も始まったが、すべての授業がオンライン形式で行われ学校には一切登校しなかった。後期は、感染者の減少に伴い、一部の授業は対面で行われた。私が履修していた教職の授業もその1つだ。しかし、ゼミを含めほとんどの授業がオンライン上での講義となった。そのため、学校に行くこともなく、友人に会うこともなく、ほとんどの時間を家で過ごした。オンライン授業は、パソコン1台あればどこからでも参加することができるので楽ではあった。しかし、オンライン上でのプレゼンにディスカッションなど慣れないことが多い上に、しっかりと授業についていけているかといった不安もあった。また、直接会って、同じ教室という場所で友人と勉強したいと強く思った。

学校生活において変化したのは授業だけではない。課外活動においても同様だ。私は、ライブラリーサポーターという大学の図書館をサポートする団体に所属している。例年ならば、新入生ガイダンス・オープンキャンパスに文化祭と、学校の大きな行事ごとの活動はもちろん、週に2回のミーティング、有名な作家の聖地を回る文学散歩、他大学との交流にビブリオバトルなどを行っていた。私にとって課外活動は、同じ学科以外の同級生やほかの学年の仲間とも交流できるととても大事な場所であった。しかし、今年はほとんどの活動が行えず、半年に2回程度オンラインでのミーティングを行った程度であった。毎朝起きて学校に行く、学校に行き先生や友達と会う、授業を受ける、放課後は課外活動に参加する、といった今までは当たり前だったことが、当たり前でなかったと気づかされた年であった2020年は、私にとって多くのものを学んだ年でもあった。

特にこの1年で私が強く感じたことは、人とのコミュニケーションの大切さである。学校に行くことなく家で一人で授業を受けていたので、友人と会い会話をする機会が減ったことで強く感じた。私の場合は実家暮らしだったので、家にいても話す相手がいたが、それでも学校に行き友人と話したいと強く感じていた。学校での友人との何気ない会話が無くなっただけで、こんなにもストレスに感じるとは思ってもみなかった。

もう一つは、ますます社会がネット化していくということである。今年は、今までで一番パソコンやスマートフォンを利用した年だと言える。特にパソコンは、定期試験期間の時にしかあまり使うことがなかったが、今年は、毎週パソコンを開きパソコンと向き合っていた気がする。授業に参加するのも、課題を行うのも、教育実習の準備も、卒業論文を書くのもパソコンであった。その分、パソコンを使うスキルは上達した。仕事だけでなく、学生の段階からパソコンの利用がこれから増々、当たり前になっていくのだと感じた。

このように、学校生活においてもいろいろな変化が訪れた2020年であった。でも、この変化を当たり前にしていかないといけないのだと強く感じた。このようなニューノーマルな社会の中で、学生生活を送れたことは貴重な経験になったと感じる。学校の授業や課外活動などの教育現場における変化は、学生でなければ経験できなかったと感じる。

5. コロナ禍で学んだこと 文芸学部英文学科 富士原友菜

以下では、コロナ禍における私の大学生活が以前とどう変わったか、それに対し何を思ったかを綴る。結論から言うと、はじめは格差の影響による不便を感じていたが、それは徐々に今まで当たり前だった事物への感謝が変わり、最終的には人との繋がりを大切にすることに変わった。自他ともに短期間で多大なストレスを抱えたことは事実だが、貴重な経験をできた点は良かったと思っている。以下に続く背景もご覧いただき、是非「本当に大切なもの」「変わらないもの」を感じていただければ幸いである。

まず、私は大学一年生から三年生の間まで、卒業や教職に必要な授業の他にも、興味のある授業や部活動へ積極的に参加する学生だった。そんなに好きでない分野の授業でも体調不良時以外休まず、中高時代とほぼ変わらない毎日を過ごしたし、仲の良かった友達数人も毎回授業に参加していた。その反面、人に合わせる事が苦手であり、共同・協力は少しできても共感あまりできないまま授業や部活動に取り組んだ三年間であった。

そして昨年コロナ禍を過ごし、これまでと違う大学生活を送った。第一に感じたのは、格差の影響である。経済的な格差だけではない。学力や生活技術の格差も大いに感じた。パソコンがあっても操作に苦しむ友達、外出しないと決まっていると朝どうしても起きられない友達など身の周りに溢れていた。コロナ感染予防として緊急事態宣言が出ると、対面授業が減って人に頼れる場面が少なくなり、それぞれの不得手やわからないことがそのまま残されてしまう場面が多くなったのだ。

皆と同様に私の「共感できない」問題も残されてしまった。人の話に共感できないと、オンライン授業で話し合いを滞らせることにも繋がったので大いに悩んだ。さらには、人と触れ合う機会が激減してしまったせいで弱点克服の機会も減ってしまった。機会を失ったのは仕方ないからできることをしよう、と遠隔授業の課題に取り組みはしたが、6月から10月までは、ストレスと自他への不満が山ほどある毎日を過ごした。対面授業が予定よりさらに減ったり、部活動の定期演奏会が中止になったりと楽しみは次々に奪われていき、ポジティブになろうと試みても無理だった。

転機が訪れたのは、11月上旬。大学のガイドラインに従いつつ、部活動が再開された。私の所属する合唱団も、オンラインコンサートに向け対面練習を多く取り入れた。三年生が執行・運営を務めるため、四年

生である私たちは毎回練習に参加したわけではないが、曲の練習の他、教室内備品の消毒や舞台設定など三年生リードのもと取り組んだ。そこで私は後輩の言動から良い刺激を受けた。三年生は特に「今の状態は〇〇だから、□□しないとお客さんに届かない」という意見を練習時口にしていた。非常に驚いた。誰を責めるでもなく言い訳や妥協をするでもなく、皆と前に進もうとするリーダーは輝かしかった。このご時世に、本番画面の向こうで演奏を聴いてくださるお客さんを意識した練習をし、自分たちの演奏を聴いてくれる人がまだいるありがたさや皆と合唱できるありがたさを感じることができるようになった。実際、ユーチューブとインスタグラムでリアルタイム配信を行い、短い時間ではあったが合唱をお客さんに届けることができ感謝は連鎖した。大学関係者の方々や社会人の先輩方への感謝、送り出してくれた両親への感謝を団の皆と共に実感した。

感謝・共感した部活の日々は授業仲間との交流に役立った。これまでは意見を言うこと聞くことや、課題をこなし自他を評価することで精いっぱいだったが、他者に目を向ける余裕が出てきた。もちろん、11月になったからといって状況が劇的に改善されたわけではなかったが、共感できることが増えたのだ。「リモートでは先生の説明を理解しづらい」「いつ、どのくらいの量の課題が、どのツールを通して出なのか、常にチェックしなくてはならず大変」という皆の悩みには深く共感した。悩みに戸惑い躓くのではなく、「私も皆と同じなのだ」と考え解決に向かうこともできるようになった。私の変化は、遠隔であっても話し合いの際皆にも伝わったようで、授業時のグループ会話を滞らせることも少なくなっていく。

冬休みの前後は集大成として、複数の授業で、課題に対するピア・レビューやグループプレゼンなどが行われた。ここで課題となったのが、対面が推奨されない世の中でいかに先生やメンバーと連絡を取り合うか、ということだった。本当は会って何時間か話せば、ひとりひとりが悩む量は劇的に減るかもしれないが、感染者が増えたこともあって遠隔の話し合いを多く用いた。

そのような環境でも、特に共同プレゼンから学んだことは大きかった。幸いなことに、一緒に発表するメンバーの中で投げやりな人はおらず、ラインやメールを使い、話し合いを重ねることができた。ここでカギになるのはニュースでもよく言われる「助け合い」だと実感した。具体的には、個人が得意なことを存分に発揮しあい感謝しあうことである。「今のシステムが複雑で印刷ができない」と困っているメンバーに「機械得意だから印刷するよ」と応えるメンバー、「説得力のある資料が見つからない」と困っているメンバーに「紹介するよ」と応えるメンバーがおり、「力になれず申し訳ない」「助けてくれて、ありがとう」といった言葉も飛び交った。私自身も共感・協力を実現することができた。当たり前のことだが、メンバー全員が完全無欠の理想的な学生たちだったわけではない。それにも拘わらず、声がけや助け合いを重ねた結果、プレゼンは「コロナ禍で作ったと思えない」「素晴らしい」といった評価を他の学生たちから受けた。大学生活最後の授業でこのような経験をでき嬉しく思った。

以上の様々な経験を経て、私は困ったことや不安を感じつつも、それらを皆と協力して解消していくことを憶えた。一年前に想定していたものは崩れ去ったが、今まで当たり前だった日常への感謝、他者への感謝を再び抱き、比較的苦手だったコミュニケーションをある程度克服するまでに至った。コロナ禍で大学生活を制限されたことに変わりないが、大切なものを見直すことができた学生は他にもいるのではないかと感じている。

6. コロナ禍の教育と大学生活 文芸学部英文学科 大槻智佳子

もうウィズコロナの時代も一年が経つ。そのような社会で最後の一年、大学生活を送り、また母校へ教育

実習に行かせていただいた経験を少しでも記録として残すべく、文章にしたいと思う。

まずはウィズコロナの時代の教育のことについてである。広く教育といっても色々なジャンルでの教育があるが、ここでは主に小学校から高校までの教育について述べたい。教育においてはインプットの教育とアウトプットの教育と言われる部類があるが、特にコロナ禍においてはアウトプットの教育における活動が制限されている。

現状、私が教育実習を行ったことから言えるのは、ペアワーク、椅子から立って移動するアクティビティ、音読などの声を発したり、移動を伴ったりする活動に関しては全てマスクをつけ、なるべく移動はしないことが原則であった。インプットでは、暗記やノート取りなど1人での活動が主となるため移動や発言が制限されないが、アウトプットでは2人以上での活動が求められる。コロナ禍では接近することや接触することなどができず、ある程度距離を保ったままの活動になる。そのため、生徒同士のコミュニケーションが少なくなり、会話やゲームといった子どもが好きな活動が制限されてしまう。

また、その方法であるところからの社会で必要となるコミュニケーション能力（英語を使い、自分の言葉で相手に意思を伝える力）が養われない。これは重大な問題であると考えられる。書く・読む能力ももちろんであるが、聞く・話す力はこれからのグローバル社会で大事であるし、例えば自分の話す英語が合っていない合っていない合っていない、自分の伝えたいことを伝えられる能力というのは、必ず必要となってくる。そのような活動が制限されている中で、教員はなるべく移動が少なく、接近しないアクティビティを考え、実施しなければならない。例えばICT機器を利用した活動や前を向いたままでもできる活動、席を移動しなくてもできるペアワークなどである。コロナ禍での教育は、世界で求められている英語力・コミュニケーション能力を鍛えることが出来ないというのが現状である。

この状況により引き起こされるものは、多く考えられる。例えば、上記に挙げたようにコミュニケーション能力や英語力、特にスピーキング力とリスニング力の低下や生徒どうしの関わりの減少、アクティビティが少なくなることで英語嫌いの子どもの増加である。学校教育では教師の介入がない生徒と生徒の関わりを主としており、アクティビティや意見交換もなるべく生徒が自主的に活動できるように教員がサポートをする立場をとる。そういった活動が制限されることで、学校教育の醍醐味が失われつつあるのではないかと感じている。

加えて、新型コロナウイルスの影響は小・中・高校に限らず、私たち大学生の生活をも大きく変えた。大学生は本来、大学に通い、大学のキャンパス内にて友達と授業を受けたり、卒業に向けた卒業論文提出にあたり、ゼミナールの活動や部活動、アルバイトや旅行、遊びをしたりするなど、やるべきことがたくさんあるのである。

しかし、ウィズコロナの現在は、そのほとんどの活動が制限され、オンラインや外出自粛といった措置を取っている。今までであれば、大学に通い会っていた友達とも半年以上は会えていないし、直接話せないことで友達の現状や今後のことも知らず、なんだか少し遠くにいるような気がする。オンライン授業で外に出ることもなく、外出自粛によりそもそも外に出ること自体が困難であり、大学生はパソコンに向かい、授業や課題に追われる毎日である。毎日のように会っていた友達とも画面上で会うだけである。

技術の発展によって、IT機器やコンピューターを使ったオンラインでの授業、会議などができるようになる一方で、生身の人の温かさや当たり前のことを当たり前にしてきた以前の生活がとても恋しく思える。教育の中で当たり前に行っていた「触れる」、「話す」といった関りが減っていくことは、子どもたちの教育における未来を変えるだけでなく、彼らの精神的な部分においても変化をもたらすと私は考える。

7. コロナがもたらした教育形態の変容と大学生活 文芸学部英文学科 庄司陽輝

新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため2020年4月に大学側から発表された内容は、春季休暇の更なる延長と5月より始まる全ての講義がZoomによる遠隔授業で展開していくというものであった。この時既に授業開始日が大幅に遅れることは決定していたが、更に先延ばしされることが決定した。周りの大学も同じような対応を取っていた。また、世間では緊急事態宣言が発令され、外出自粛が呼びかけられた。故に外出はほとんどせずに家に籠っていた。

授業開始日になっても学校に行くという訳ではないので、実感が全く湧いてこなかった。なんせZoomを使った遠隔授業など初めてだった上、普段家で勉強している机で大学の講義を受けるという違和感しか覚えないうスタイルであったからだ。

私は卒業要件単位が所属しているゼミと卒論を除けば足りていたので、教職以外の科目で新たに履修を組む必要は無かったのだが、興味本位で「中国語中級 a,b」を履修することにした。初回の授業で思ったことは、授業の円滑さに欠けるなど一番に感じた。というのもWi-Fiの通信環境が悪いと応答が遅れ、それを待つことで授業が中々進まないという事態が発生してしまう。教員側からしても初めてのことでと思われるので、操作方法が曖昧だとその確認作業だけでも時間がかかってしまう。画面共有を通して我々学生と教員が同じ教材、資料を見ていることになるが、教科書通りでなかったり書き込みがしづらいということもあつたらしく、どう板書をしてよいか戸惑う場面もあった。また、小テストを行う際は簡単にカンニング等の行為が出来てしまうため教員側もそれを配慮して、教科書などは見ながら取り組んでよいと仰っていたが、そうすると本当の実力を知ることができないという点で無意味であるな、と感じてしまった部分はある。90分の生の講義と遠隔の授業とでは終わった後の達成感であったり、学んだ感覚に大きなギャップが生じていることも事実である。

ゼミや教職の授業に関しても、Zoomの授業という形を取らずに課題だけが与えられ、それを定刻までに提出しフィードバックをもらって、またそれを繰り返すといった具合で、高い授業料を払っているのにこのクオリティかと思ってしまうことが何度もあった。ゼミに関しては私が4年生なので「卒論」という大きな課題があり、やはりお互いが顔を見合わせた生のやり取り、意見交換を展開して行って欲しかった。遠隔であると中々教授にも質問が出来ないし図書館も気軽に利用できなかつた為、資料集めに苦労した。

これまでマイナスな面ばかり指摘してきたが、もちろんプラスな面もあった。登下校の時間と交通費が浮いた分睡眠時間が確保出来たこと、課題提出等も印刷などの手間が省け、データ上でのやり取りのみで完結していた点、Wi-Fi環境があればどこでも授業が受けれた点などである。

遠隔授業が主体となったことで、パソコン疲れする学生が増えると思った。幸い私はほとんど授業が無かつたのだが、1～3年生の学生は1日に何コマもパソコン、スマートフォンを使用して授業を受けることになるので、身体的にかなり疲労するのではないかと思った。また、中々外出することができないというのが学生にとって一番堪えがたいことであると思った。かけがえのない友人に中々会えず、SNSを通してしかコミュニケーションを取ることができない。ましてや1年生はまだ一度も大学に通っていないがために、一人も友人が出来ないという状況が蔓延していると思われる。

このように新型コロナウイルスの影響は私たちの想像をはるかに凌駕して、私たちの生活を180度変えてしまった。今まで当たり前できていたことが当たり前ではないということ、何度も何度も痛感させられた。毎日の新規感染者や医療崩壊が迫っているというニュースの繰り返しにうんざりし、世間は暗くなっていく一方であると感じている。そんな中でも更なる感染を広げないように自粛に徹底することしかできないので、

1日でも早くいままでの当たり前が日常に戻ってくるよう、また友人たちと笑って過ごせる日々が来るよう祈るばかりである。

8. コロナ禍での選択 文芸学部英文学科 中山怜音

2020年はコロナウイルスにより誰もが想像していなかった年になっただろう。学生最後の年に、様々なことが規制され、思うように行動できないストレスや悲しみを多く感じた1年であった。以下では、日常が一変したコロナ禍での私自身の経験や、思いを綴る。

コロナ禍において、100%の教育を受けることができた人は少ないだろう。大学は、ほとんどすべての授業がオンラインになり、学校施設の利用も制限されてしまった。これまでと変わらない授業料を支払うことに不満を感じてしまったのも本音である。

今までの教育との大きな違いは、やはりオンライン授業だろう。地元での就職活動や教育実習の関係で、実家に帰省していた私にとって、休まずにみんなと同じ授業を受けることができたという点ではよかったが、オンライン授業ではコミュニケーションが課題であると感じた。出された課題の内容の意味が文章のみの指示では伝わりづらく、何を指示されているのか、どう取り組めば良いのかわからないことが多々あった。話して伝えるのと、文字で伝えるのでは伝わり方が異なるので、より分かりやすく伝える力が必要であると感じた。

また、オンライン授業では、発言することを躊躇してしまい、議論が盛り上がらないということもあった。オンライン授業という環境に慣れ、その中で自分がどれだけインプットしようと努力するのが大切であると感じた。教育実習や卒業論文といった、大学生活の集大成を前に、模擬授業ができなくなったり、資料が思うように集められないなど不安は多くあったが、これまでなかった事態に対応し、教育や知識を届けてくれた先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。

2020年を振り返ってみると、私はほとんど地元にいる。就職活動の面接や、教育実習などで東京と地元を行き来しなければいけない状況は、精神的にもとても苦しかった。もしも自分がコロナだったらどうしようという不安を常に抱きながら生活しなければならなかった。地元へ帰省する際は、2週間前から出歩かないようにし、徹底的に感染対策をしていたが、それでも不安は完全には消えなかった。就職活動をしている際は、対面で授業をしてもらえる環境があることはとてもありがたかったが、一回の授業のために東京に戻ってきて、またすぐに面接のために地元に戻るといった生活は大変であった。

また、そのような生活の中で、正しい選択をする重要性を改めて感じた。大学生活最後の年だから遊びたいという気持ちを抑えて、家族や地元で迷惑をかけないように、きちんと外出を避けるという選択をすること、周りの人たちのことをきちんと考え、選択することが求められていると感じた。これまで、当たり前に行っていた帰省が思うようにできなくなり、帰省するたびに不安がつきまとう環境は苦しかったが、コロナ禍で生きていくために必要な、大切な人たちを守るための選択をする力の大切さを感じることができた。

大学生活最後の年、大学に行けない、友達とも全く会えない、卒業旅行にも行けない、やりたいことができない1年であったが、その中で自分がすべきことを考えさせられる年であった。ICTを使える環境、教育実習を行わせてもらえる環境、対面で授業を受けられる環境に感謝し、自分のできることに全力で向き合うことが重要だと強く感じた。当たり前が当たり前ではなくなった今、少しでも日常を取り戻すための選択を続けていかなければならないと感じる。

9. コロナ禍の教育と大学生活について 文芸学部ヨーロッパ文化学科 姜愛香

コロナウィルスの影響により2020年度の大学の授業はオンライン形式となった。授業によってはZoomや課題での対応となったが、いずれにしても新しい試みであった。回線の問題などでオンラインでの受講は、スムーズにいかないケースや画面が固まってしまうアクシデントも生じたが、教育実習の準備やその他外部試験を控えていたので、個人的には自宅で受講できるのは時間を有効活用できたのではないかと思う。特に教育実習の準備は、指導教諭にお尋ねしてもなかなか進捗を把握できない状況であり、従来の実習生よりも準備に多くの時間を有したので大変苦労したが、例年よりも自由な時間があつたので何とか対応できた。

また、Zoomでの授業は対面式の授業と同様に、受講メンバーとの意見交換が可能な点が従来の授業と同様可能であつたので、比較的深い学びが実現できたのではないかと思われる。講義形式の授業はプリントが配布され、それに対しコメントを記入することで出席とされたが、従来の授業よりも自ら学ぶ姿勢がより求められるように感じた。というのも、生身の人間の言葉を聞くわけではないので、自分で活字を解釈し知識につなげる作業が必要なので、従来の授業よりも積極性が求められると実感した。

このような面では学習により取り組めたのではないかと思うが、図書館が使いにくい環境であつたり、授業数の多い一、二年生にとってはつらい時期だつたのではと思う。卒業論文を仕上げるために多くの文献が必要であつたが、図書館で借りず購入した。学術文献は安価ではないので苦学生にとっては大変大きな出費であつたが、より一言一句逃さず学び、同じ文献を何度も読み直そうという姿勢につながつた。

社会的に人との接触を減らそうという主張がなされている。確かにそれによって感染リスクは減らすことができる。コロナウィルスの流行によって、大学に通う日数が減り、その結果友人と話す機会が減つたことによって、改めて友人と話し意見交換することの重要性を実感した。やはり画面越しの会話と直接顔と顔を合わせた会話とは違う。科学技術の発展によって、オンラインでの授業が発展して対面での授業は古い、日本も早くすべての学校に科学技術を導入しようという主張がコロナウィルス流行直後なされていたが、それには全肯定できない。

今回オンラインでの授業を経験してみて、やはり対面の授業の方がより気が引き締まり、授業に集中できると思つた。教師にとっても学生のリアクションが見えるので授業をしやすいのではないかと思う。だが、オンライン上で受講し、自分のペースで黙々と進める方が落ち着ける人や学校に通えない学生にとって、オンライン授業は最後の砦になるだろう。なので、一長一短ではあるが、私の聞く限りでは、やはり対面の授業で友人と対面で意見交換する方が好まれる。このコロナウィルスの流行によるオンラインでの授業を経験して、すべての学校教育に科学技術を導入するのはいかがなものかと考えた。

10. コロナ禍の教育と大学生活 法学部法律学科 鈴木翔太郎

私はコロナ禍の教育と大学生活について述べていく事とする。

まず、自身の大学生活について述べていく。最初に授業についてであるが、大学4年の授業は教職科目以外については全てオンラインでの実施であつた。勿論初めての経験であつたが、良い面もあれば悪い面もあつたと感じる。

良かった点としては、自分のペースで学習をする事で学習効果が高まつた点である。わからない箇所があれば戻ることができ、足りない知識を補いながら受講することが可能であつた。また、授業自体を何度も視聴することが出来るといった点は通常授業では不可能であつたため、より深い学びに繋がつた。

悪い面としては、分からない箇所をすぐにクリアにする事が出来ず、質問から回答までの時間がかかる点

である。自分で調べるといった機会は増えたが、より正確な知識として獲得するには教授の指導も必要であった。学習意欲に関しても友達と学ぶといった環境の方が高く、課題に対しても同じ課題に対して向き合う人がいることで、新しい視点や考えを得ることが出来ると感じた。これは教職実践演習や社会系教育実習でのプレゼンにおいて、同じ課題に対して取り組み、発表する事の重要性を身をもって感じる事ができ、さらに実感した点であった。

また、課題の量は教授によって異なり、他授業の兼ね合いでかなり困難な課題もあったため、見直しが必要なのではないかと感じた授業もあった。が、総じて机に向かう時間が長くなった事で1つ1つの授業効果は高まったように感じた。

次にコロナ禍の教育について述べる事としたい。先に述べた大学での授業についても同様の事が言え、このコロナ禍によってオンライン授業が普及されたわけではあるが、最も重要な点は変わらず、アクティブラーニングの必要性を感じた。

学習指導要領の改訂がなされるなど近年様々な動きが見受けられるが、やはり生徒が主体的に考え、行動する事で現代社会を生き残るための術を身につけていくべきなのではないか。生徒エージェンシーといった言葉を耳にする機会も増えたが、これまでの座学中心といった授業をここで見直すべきではないか。多くの中学校あるいは高等学校では、カリキュラムが終わりそうになく、夏休みを返上してまで授業を行なった学校が多いのではないか。これは詰め込み教育が未だ残っている証拠とも考えられる。自ら考えさせる能力を養うために一定の学力が必要なのは言うまでもないが、まだまだ膨大な知識を求める授業が多いように感じる。

教育実習校の取り組みにおいて特進クラスといったレベルの高いクラスでは、知識の詰め込みではなく語句について誰かに説明するといった学習方法が取られていた。今年度から始まる共通テストで求められる力を養うための練習が早速見受けられた。また、オンラインでの授業により、普段発言する事が困難である生徒の答えや考えも、オンラインの機能なら把握する事が出来るといったプラスの側面も見受けられた。こういった1人1人が考えて取り組むといった授業形態を推進させていく大きな機会であったと強く感じた。現在直面している実生活上の困難に対して1人1人が目を向け考えることで、これからの未来に繋がるような学習をしていくべきであると強く感じた。

第三節 コロナ禍と学生生活 (アルバイトなど、学校以外の場での事象も含む)

ここでは、教育実習生、大学における学習者、そして市民・生活者、あるいは労働者という複数の側面における2020年の経験、またその経験を通じた自分の価値観や生活、学びの変容を、受講生たちが総体としてどのように意味づけているのかを見ていくこととしよう。

1. コロナ禍の学生生活 経済学部経済学科 米原瑞貴

私がコロナ禍で感じた生活の変化は主に4点ある。部活動・アルバイト・学校生活そして就職活動である。第一に、部活動について述べる。私は、大学の体育会バドミントン部に所属している。活動は例年だと、3年次に主将や主務といった役職を割り当てられ、部活の中心として引っ張っていく。そして、4年次はそ

の役職から退き、就職活動と部活動を両立していく。最終的な引退試合は、4年の10月に毎年行われている四大戦である。1年間で2回はリーグ戦という、インカレにつながる大きな試合も実施されている。今年はコロナの影響でこの予定がほとんど変更になった。3年の後輩は役職を全うするのも困難な様子だった。主将は主将としての試合での姿を見せることができず、悔しい思いをしていた。それを見て、自分自身も悔しい思いをした。

また4年の身としても、歯がゆい思いをした。先述したとおり、例年、最後の引退試合は四大戦という対外試合だが、今年は中止となり公式的な引退試合をすることはかなわなかった。後輩の厚意により、私は校内試合を引退試合として行うことができた。しかし、上述した通り、他校では引退試合をすることなく現役を引退しているところも見受けられたため、そういった状況を目の当たりにするとコロナの影響力の大きさを感ずる。

第二に、アルバイトについて述べる。私は、アルバイトでスーパーのレジをしている。ニュース等でも報じられている通り、コロナになってからのお客様の過敏な様子は、時々対応していて悲しい気持ちになることがある。例えば、しっかりと対策をとってゴム手袋をしていても汚いといって怒られたり、感染予防のためにお客様と従業員の間にある板が妨げとなって声が聞こえづらいからという理由で怒られたりすることが、多々起きるようになった。過敏になってしまうのもわかるが、もう少しお互いを思いやった行動がこういふときこそ求められるように感じた。

実際に、このような暗いことばかりではなく、感謝されることもあった。コロナが流行し始めた際に、「こんな状況にも関わらず一生懸命働いてくれてありがとう」とお客様に言っていたことがある。コロナ禍で失業してしまった人や、閉店に追い込まれた飲食店も多く見られるが、スーパーは家庭消費が高まっている今、非常に需要が高まっており、混雑することも多くなった。そうした状況下でもこうした感謝の気持ちを持って、お互いに接していきたいと考えるようになった。

第三に、学校生活について述べる。大学は4年の前期から完全にリモートへと切り替わった。一度も教授と対面することなく授業を受けて単位をとるというのは、心なしか味気ないように感じた。家事をちょっとしつつ授業を受けるということが可能になったため、効率的ではあるものの、日常と授業の境界線があいまいになってしまったように感じる。教育実習は無事に実施させていただくことができたものの、同じ学校で教育実習を行った学生の中には、リモートでしか模擬授業をやったことなかったという人もいて、準備の進捗が人によって大きく違ったのではないかと思う。

また私は高校1年生の担当を持ったが、1年生は入学して早々にコロナが流行してしまったため、10月でもまだ少しよそよそしい雰囲気であった。高校の先生からもまだなじめていない子が数人いるような状況であると聞かされていたが、想像よりその影響は大きかったように思う。私の担当したクラスの生徒は比較的明るく、他の先生方にも元気のいいクラスでよかったねと言われたが、授業をしたクラスのもう一方のクラスはまだまだ打ち解けていないような様子であった。打ち解けていないと、授業を作るときも1人1人の個性を生かしきれないことが多くなるので、実習を進める上で多少の障害にはなった。

そして一番影響が大きかったのが就職活動である。今年度の就職活動は異例なことが多く、非常に不安ばかりであった。リモートでの面接が当たり前になり、どの企業もコロナについて面接で触れるようになった。

私は3年の10月ごろから就職活動を行っていたため、対面の面接も多く経験していたが、リモート面接はよく言われているように本当に相手の雰囲気が全く読めない。自分自身も最大限に魅力を伝えたくても、小さい画面にどう映るかを考えるとどうしても小さく収まってしまふ。小さく収まろうとすると、縮こまっ

て自信がなくなったり、声もうまく出なかったりということが起きるようになった。こうした状況下で不安なことが多くても、周囲にこのような状況を経験した人は自分の世代しかいないために参考にしづらい面が多かった。私はエントリーシートを書くために過去の他の人のものを参考にしていたが、今年は面接を行うことができないために面接の代わりにエントリーシートをもう1枚書くように指示された際には、参考にするものがなく戸惑ったのを覚えている。例年はない評価方法で評価されるというのは、就職活動をする上で大きな障害であり、その差はもっとも強く感じた。

日常のあらゆる場面を変えたコロナであるが、これからはうまく付き合い共存していきたいと思う。

2. コロナで変わった実習と就活 経済学部経営学科学生

2020年10月、本来であれば5月に行く予定だった母校へ行き、3週間の教育実習を行った。コロナ禍においても私の住む自治体は市立小中学校で教育実習生を受け入れることを決め、時期は変わったものの予定通りの日数で実習を行うことができた。もちろん実習中においてもコロナ禍だからこその経験をしたが、これらの経験の記録は他の学生に任せ、私はコロナ禍で教育実習がずれた結果、私の身に起きた出来事を記録する。

中学社会科の教員を目指して教職課程を履修し始めた私は、大学生活を送る中でやりたいことが変わり、将来の選択肢を増やすために教職課程をとりつつ、教育現場とは異なる職業へ就きたいという思いが大きくなった。その業種に就くため大学3年生の中ごろから就職活動を細々と始める中で、その業界の企業の多くが例年採用面接を5月中に行っているということを知った。新型コロナウイルスという未知の脅威と出会う前にこの事実を知った私は、教育実習と就職活動、どちらを諦めることもできず、志望している企業に面接の時期をずらしてもらえないか確認をとるなど、何とかこれらを両立できないかと解決策を模索していた。結果としてその業界で通年採用を行っている企業をいくつか見つけ、それらを中心に就職活動を進めていくこととしたが、やはり選択肢が限られ、納得のいく就職活動にはならないのではないかと感じていた。

しかし、大学3年生の終わりに近づくにつれ、新型コロナウイルスが猛威を振り始め、緊急事態宣言の発令、外出自粛、休校、臨時休業など数か月前までは想像もできなかった社会全体の変化が起きた。実習と就活の両方に取り組もうとしていた私は、どちらもその後の見通しが立たなくなり、これからどうなるのだろうという漠然とした、しかし確実な不安を抱えていた。そんな中、実習先から教育実習の実施を一度見送るという連絡がきた。実習ができないのであればどのように教員免許を取得するのだろうかという戸惑いを覚えつつ、私は同時に、これで就職活動へ精を出すことができるという期待を覚えた。

各企業においても、コロナ禍においてどのように採用活動を行うのか思案していた時期であったため、多くの企業がまだ動いておらず、就職活動に乗り遅れることなく挑むことができた。その結果、5月ごろから本格的な採用活動が始まり、オンラインの企業説明会や面接など普段とは異なる就職活動を行いつつも、6月中には志望している業界から内定を得ることができた。

就職活動を満足いく形で終えることはできたが、コロナ禍で行動も制限され、思うような学生生活を送ることができていなかった私に、実習を10月に行うことが決まったという連絡がきたのは8月末ごろであった。卒業旅行など友人との予定も満足に立てることができず、それどころか大学に行って友人と会い講義を受けられるわけでもない、ただ自宅で時間を浪費しているように感じていた私は、そのような状況下で決まった教育実習に特別な思いを持って臨むことができた。

当初は不安であった教育実習と就職活動の両立であるが、コロナ禍という特異な状況であるからこそ、私

はどちらも満足いく形で終えることができ、その点においては幸運であったと思う。社会が困難にある中、このような結果を得ることができたのは当たり前ではないということを噛み締め、社会へ邁進していこうと思う。

3. コロナ禍が生んだ価値観の変化 経済学部経営学科 小泉莉捺

2020年、コロナ禍における私の生活は、以前とは全く異なった生活になった。世の中的にはマイナスなイメージが大きかった1年間であったが、私個人としてはむしろ感染対策のための新しい生活様式に快適さを感じることも多かった。しかし、やはり窮屈に感じる点もあった。なぜそう感じたのかについて、家族、交友関係、学業及び学校生活、アルバイト、教育実習の計5つの側面から述べていきたいと思う。

まず、家族との生活面での変化についてだが、家族での旅行を一切しなくなったこと、祖父母に会う回数が減ったことの2点が分かりやすく変わった点であった。以前は遠くに旅行に行くこともあったが、教育実習や就職活動を控えていたこと、世間の自粛ムードを受け、どこにも旅行には行かなかった。これ自体、別に何か不満を感じているわけではないが、祖父母に会える回数が減ったことは、祖父母の寂しさが伝わり、自分のせいではないし、むしろ祖父母の健康を気にかけての変化ではあるが、申し訳なく思ったし、祖父母孝行をする機会が減っていることを残念に思った。家族とすら会えない状況になってしまったことに、コロナの恐ろしさを感じた。

次に、交友関係での変化について述べていきたい。大学に行って授業を受けていたときは、嫌でも顔を合わせる事ができた友人たちであったが、授業がリモートで行われるようになると、自分か相手かのどちらかが何かしらのアクションを起こさなければコミュニケーションの機会が生まれにくい状況になり、就職活動も重なって、友人との連絡の頻度は以前と比べるとかなり減ってしまった。しかし、毎年行っているから、というだけの理由で開かれる飲み会等がなくなり、少し楽になったような気持ちもした。そして、緊急事態宣言が明けて、ずっと会いたかった人と会えたときは喜びもひとしおであった。会いたい人に会にくい状況にはなってしまったが、会えることや、接点を作りにくいこんな状況でも、自分を気にかけてくれる大切な友人の存在の有難さを教えられた、そんな1年間でもあったような気がする。

学業や学校生活の側面ではどんな変化があっただろうか。まず、学業はオンライン授業になったことで、匿名性が上がり、質問しやすくなったという声は散見されたし、実際、私も発言しやすくなったと感じた。しかし、もし私の苦手な計算が授業内容に含まれているものだったら、逐一計算方法をチャットに記入して聞くわけにもいかないし、レスポンスの即時性が求められるため、授業についていくことが困難になってしまっていた可能性もあると思った。

学生生活については、通学時間が大幅に減少したということが、私を感じた大きな以前との変化だ。時間と交通費の節約ができたことは、就職活動中であったこともあり、個人的にはかなりプラスに感じられた。これは次に述べていくアルバイトの話とも繋がるが、幸運にも私の働くアルバイト先は生活必需品を取り扱う店であり、緊急事態宣言下でも以前とほとんど変わらないくらいの労働時間を確保することができたので、消費はしないがお金は入ってくるという状況になり、貯蓄にお金が回るようになった。個人的にはこれもプラスに感じられた。

アルバイトでは、バイト先の特質上、休むわけにはいかない仕事をしてきたため、以前と異なると感じる点はあまりなかった。せいぜい積極的な営業活動の自粛をしたくらいで、客足がめっきり減ってしまうということも特になかった。ただ、一つ取り上げるとするならば、私の中のアルバイトの捉え方が大きく変わっ

たことは、コロナ禍にならなければ変わらなかったこととして、特筆してもよいのではないと思う。以前は、アルバイトは仕事をして稼ぐだけの場所、時間であると思っていたし、プライベートとアルバイトが混ざり合っては仕事にも悪い影響を及ぼしてしまう可能性があると考え、アルバイト先の人と深く関わることを避け、アルバイトに肩入れし過ぎないように注意していた。

しかし、コロナ禍によって自分が過ごすコミュニティごとの時間に大きな変化が生じた。以前までは大学内のコミュニティ、ゼミナールのコミュニティが、自分がどこかのコミュニティに属して過ごす時間のうちの大部分を占めていたが、コロナ禍と就職活動が重なり、アルバイト先が一番長い時間属するコミュニティになったのである。コロナ禍において貴重なリアルでのコミュニケーションの機会であるだけに、自然とアルバイト先の人との会話が弾み、仕事に打ち込むようになっていった。様々な娯楽が不要不急と制限される中で、アルバイトを通じて人と触れ合うこと、学ぶこと・挑戦することで自己実現を果たしていくことが唯一の楽しみとなっていたのだ。コロナ禍においては、楽しみが脅威に、つまらなかったことが生き甲斐にもなってしまう。そういった意味では、良くも悪くも大きな価値観の変化を生み出したのかもしれない。

そして、このコロナ禍に実習を行った者として、最低限記しておかなければいけない、教育実習についての変化であるが、この大混乱の中で当然のことではあるが、実習時期が遅れ、実習時期も各校によってバラバラになり、授業中の討論がしにくくなった。私が実習に行った学校は以前と変わらず対面での授業を行っていたため、授業スタイルに以前と大きな変化はないと思われるが、体育や部活の応援の時、本来であれば褒めてあげたいところだが、このコロナ禍、大きな声を出している生徒を注意しなければいけないことに、教員、実習生側も心を痛めていた。

コロナ禍の実習は、物理的な苦労だけでなく、精神的な苦労が絶えなかった。絶対にコロナに感染しない、させてはいけないと神経をとがらせていたからだ。そして、教員の多くは、自分たちの苦労には目をつぶっていたが、生徒たちが修学旅行や文化祭の中止に嘆く姿を見る方が辛いといったようだった。それは私も、教育実習生の仲間の多くも同じであった。少なくともあと1、2年は、コロナ禍における以前とは違う特別な実習が続くのだと思う。しかし、そう悲観することはないと思う。工夫次第でいくらでもコロナ禍を楽しく乗り切れることはできるはずだからだ。だが、私はその工夫ができなかった。自分のことで精一杯になってしまった。だから、これから実習に向かう方々には、子どもたちの心のケアに努めてほしい、そのための時間と心の余裕を持って行ってほしいと切に願う。

最後に、これまで私はコロナ禍における学生生活について、好きに述べてきたわけだが、大学生活を楽しむだけ楽しみ、あと1年で卒業というタイミングにこのような生活の変化になったからこそ、こんなに能天気なことを言っていたのだと思う、ということを書いておきたい。コロナは我々の生活を一変させた。それはプラスにもマイナスにも働き、価値観をも変えた。しかし、起きてしまったことは変えられないし、未来を創るのは今の自分自身だ。今後もコロナによって苦境に立たされることが予測されるが、コロナによって生活を変えられるのではなく、自分を変えていく、という強い気持ちを持ち、この惨禍を乗り切りたい。そして、この取るに足らない私の記録が、同じように思った人や、コロナ禍の渦中にいた者がどのように考え、感じたのかを知りたいという人の役に立てれば幸いに思う。

4. コロナ禍と学生生活 文芸学部国文学科 小崎実希子

今年は何もかもが異例だった。私の生活は、家庭、バイト先、大学、芸能活動の主に4つで成り立っている。4つすべてに大きな変化があった。

まずは、家庭内である。母が医療関係者であるため、外出や、家での衛生管理については特に厳しく注意を受けた。そして、新型コロナウイルスの話になると家の中がピリピリとした空気になることが多くなった。また、私のアルバイト先が飲食店であるため、4月に発令された緊急事態宣言中は、アルバイトに行くことが渋られた。悩んだ末、とりあえず一週間はバイトを休むことにした。その後、緊急事態宣言中や、解除された後も客足が遠のいたため、勤務時間や勤務日数が減ることとなった。そのため、何に対してお金を使うべきかをいつもより考える日々を過ごした。今まで自由に使えたはずのお金が減ることで、心まで貧しくなってしまうような感覚があった。

飲食店であるバイト先では、検温、マスク、アルコール消毒、ゴム手袋などの衛生管理を徹底し、その分仕事量がほんの少し増えた。そのことや、売上の低下を受け、従業員で支え合いながら働こうという意識が強まった。またお客様からは、お客様の数が減ったことを心配される声や、労いの言葉をかけてくださる方がいた。コロナ禍になって、職場環境に恵まれていることを改めて感じた。

大学では、前期は遠隔授業となり、後期は遠隔授業の選択が可能な授業がほとんどとなった。電車通学の必要がなくなり、コロナ感染リスクを減らすことができるにことに対してありがたさを感じた。一方で、今までの学校生活の中で管理してきたデータや情報の数を軽く超えるものを管理し、提出することになったのだが、そのようなことに関して苦手意識が強いため、個人的に難しさを感じた。

また、卒業論文にまつわる情報を集めることにも苦労した。国立国会図書館への利用が制限され、抽選を経なければ入場できないことがかなりの痛手であった。これを受け、参考文献の少ない作家を研究対象に選んだ。それだけが作家を選んだ理由ではないが、素敵な作家と巡り会えた気がした。たしかに資料集めには苦労したが、コロナ禍でなければ今の卒業論文は出来上がっていなかったであろうとも思う。

最後に、芸能活動についてだ。私は舞台女優をやっているが、2020年の春に予定されていた舞台は無期限の延期となり、その年の仕事はほとんど無かった。あったとしても、無観客ライブや、映像配信となり、生のパフォーマンスを届けることは叶わなかった。特に、春から夏にかけての舞台への、世間あるいは政府からの風当たりは強く、悔しさを感じる時期があった。周りには、なんとか生き延びようと工夫を試みる方々や、芸能活動を諦める方々がいた。一人、また一人と芸能界を去っていく方々を知り、不安を覚えた。この先どうなるかなどわからないが、結局のところはただ演ることが全てであるのだと思い、不安を振り切るようにしていた。現在は、自分の未来を考え直し続けている。

暗いことが多い一年であった。だが、提示された選択肢のなかで最善を尽くすこと、選択肢を自分で増やしていくことの大切さや、何より、ただ生きていること自体が尊いことであるのだと強く感じた。「コロナ禍でなければ」と、きっと誰もが思ったであろうが、なんとか今、最善を尽くしていきたい。

5. コロナ禍と学生生活 文芸学部国文学科 松崎穂高

2020年度は、新型コロナウイルスの影響で、社会的に大きな生活の変化が見られ、「新しい生活様式」が行われてきた。それは小中学校及び高校だけではなく、大学などの教育機関でも影響が見られた。本来であれば新学期が始まる4月になっても授業が始まらず、もちろん各部活動団体の新入生を歓迎する会なども対面では行われていない中、新入生はこれから始まる大学生活や交友関係づくりに大きな不安を持ったことだろう。

私自身も3月の時点で、大学の講義はもちろん5月に予定されていた母校での教育実習や、7月の教員採用試験がどうなるのか不安になりながら日々を送っていた。大学はいつから講義が始まるのか、対面で行わ

れるのか、生徒だけでなく大学関係者も大変悩んでいたことと思われる。5月に入り、ZoomやWeb Classで講義が始まったが、先生方も慣れておらず、うまく接続できなかつたり、録音できていなかったり、大変そうにしている様子が画越しにも感じ取れた。大学4年である私でも困ったことがあって戸惑ったが、友達も作れていない新入生は、相談できる人もいなくて、とても大変な思いをしたと思う。

オンライン授業は、先生方や大学の努力の甲斐があり、普段の対面の講義とほぼ変わらないクオリティであったと思った。少人数の講義では、むしろ今までより一人一人の発言の機会が在ったように思われた。しかしやはり画面越しなので熱が感じられず（もちろん授業自体には熱はあった）、発言者以外はミュートにしていたりしていることから、先生側はリアクションが読み取りづらかったのではないかと思った。大人数の講義では、先生があらかじめ録音しておいた講義を聞いたが、決められた期間の中で自分の好きなタイミングで受講出来たし、一回聞いてわからなかった部分などは巻き戻して聞くことが出来たので、利点があると思った。大学は、講義形式が基本であるため、オンラインでの利点も多く見られたが、小中高の目指す対話形式の授業ではこうはいかず、大学だからオンラインが許されたと思った。

講義の中で気になったことや、発表の資料などは、今までは図書館で調べていたが、大学構内に入れなかったので叶わなかった。私は卒論を除き、発表が必要な講義がなかったのも、そのような機会があった学生たちはどうしたのかが気になった。また「自分で多くの資料を探し、見つけて調べまとめる」というのが大学での学びの醍醐味だと自分自身思っているのも、この一年間それが出来なかった後輩たちを不憫に思った。

卒論に取り掛かった夏休み期間になると、大学図書館も制限付きで開館をしていて、よく通ったが、二時間しか滞在できず、閲覧席も使えなかったのが苦しかった。調べていくうちに「これも必要だ。」「ここも見てみよう。」と資料を漁っていくスタイルだった私には、二時間ではとても足りず、家に帰ってから「ここも必要だった、ここがないと進まないや」となり、往復2時間の通学路を何日も通い続けたのが苦だった。難しいことだとはわかっているが、4年生だけでもソーシャルディスタンスや入館人数の制限をつけて自由に利用させてほしかった。

コロナ禍での大学生活を経験して思ったことは、今まで以上に自主性が大切だということだ。自分で時間を決め、講義を受ける。一日の予定やその先の予定、生活リズムをしっかりと立てる。このことがとても大切だと思った。ぼーっとしているとすぐ一日が終わり、一週間が終わり、一か月が終わる。だからこそ、このコロナ禍だからこそ知識や人間力などの「自分磨き」をしっかりとすべきだと思った。意識して無駄なく計画的にこの一年を過ごしていた人と、ただ長い休み期間を過ごしてしまった人とでは大きな差が出来てしまったことだろうと思った。私自身、自分に厳しく過ごしていたつもりだが、もっと出来たと反省している。この期間は自分自身と向き合い見直すことができ、いい経験となった。これからの人生に生かしたいと思う。

6. コロナ禍と就職活動 文芸学部英文学科 下園えみり

2020年初頭に新型コロナウイルスというものが世界に現れた。それは人に死をもたらすほどの恐ろしい感染症である。その感染症は日本にも広まった。現在、その感染症が日本または世界に流行し始めた当初では、予想をしなかった人数が毎日感染し死者を増やしている。この感染症によって、人々の生活は大きく変わった。影響を受けてない人はいないと考えられる。もちろん私の生活も大きく変化した。

新型コロナウイルスが流行し、感染を防ぐために今まで対面だった大学の授業が5月からオンライン授業になり、大学に行かなければならない用事がない限りは大学に入っただけではいけなくなってしまった時期があった。後期からは適宜対面の授業も増えたが、オンライン授業と並行して進められている。

またサークル活動は人数が多く、密になってしまうため行えなくなった。これは新型コロナウイルスが収まらなければ、行うことは厳しい現状にある。私が行っているアルバイトの塾講師も新型コロナウイルスが流行し始めた頃は、オンライン授業を行っていた。現在では、マスクにフェイスシールドをつけ、アクリル板越しに授業を行っている。人と密接に関わりづらくなっている現在、コミュニケーションの仕方にも変化が現れている。私がオンラインでコミュニケーションをとることが難しいと感じたのは、大学3年生の夏ごろから行っていた就職活動である。以下では、従来の就職活動と異なっている点や私の考え、感じたことについて述べていきたい。

私は、先ほど述べたように3年の夏ごろから就職活動を行っていた。数社のインターンシップに応募し、エントリーシートや面接の対策等を行っていた。夏のインターンシップの選考会では企業と対面で面接が行われたり、応募した就活生同士でのグループディスカッションが開催されたりなど対面で行われるものが多く、直接コミュニケーションをとることが重視されているように感じられた。またインターンシップでは、同じ就活生と協力して与えられた課題をやり遂げるなど、チームプレーを目的としているものが多かった。

しかし、新型コロナウイルスが流行してからは、その形態ができなくなった。主にそれを感じたのは、2020年の3月からである。一般的に3月から就職活動の本選考が始まり、気になる企業にそれぞれエントリーシート説明会を予約するのだが、その説明会が延期になった。いつ始まるか見通しがつかず不安になったが、その説明会はどの企業も対面で行われず、オンラインになった。企業に直接お伺いする説明会であれば、社員の方に直接質問を行えたが、それが不可能になった。また会社や社員の方々の雰囲気などを感じる事が出来たが、オンラインだとそれすらもできない。その時私は、このような形で本当に行きたい企業が見分けられるのか不安だった。

また悪いことはその後も続いた。夏や冬にインターンシップに行かせて頂いた企業の早期選考が何社か決まっていたが、それが全て延期になった。私は教育実習が5月25日か6月13日までの3週間ある予定だったので、その期間はなんとしても避けたいと考えていたが、次々に企業の早期選考が延期になったので、このままでは教育実習と被ってしまい、選考が受けられないと絶望的になっていた時もあった。しかし、教育実習は幸いなことに9月14日から10月3日に延期されたので被らずに済み、思う存分就職活動に打ち込めた。エントリーシートやテストをクリアしていき、十数社面接を受けたがほとんどがオンラインで行われており、対面の面接は最終面接などの最終段階でしか行われていなかった。オンラインで行われる面接は、対面の面接と違い表情や雰囲気が相手に伝わりづらいため困難であった。そのため、私はオンラインでも相手に自分のことをどのようにしたら伝わるか考え、話し方や行動、表情などを精一杯表すように心がけた。今、考えるとオンラインでも自分が相手に伝えたいという意思が本当にあれば、相手にも伝わると私は考える。

新型コロナウイルスの終息はまだ見えないが、私たちは以前と同じように生きていかなければならないので、少しでも人々が過ごしやすくなるように工夫をして生きてかなければならないと考える。今の大学3年生や今後就職活動を行う学生に私の話が少しでも役に立てれば幸いです。

7. コロナ禍における部活動について 文芸学部英文学科 古川勝也

以下では、コロナ禍における学生生活の変化について述べていきたいと思う。

私は大学一年生の頃から体育会ラグビー部に所属して部活動に打ち込んできた。本当にラグビーが大好きで、部活動のおかげで大学生活が充実してきたといっても過言ではない。そのため、四年生になり自分たちが最高学年でチームをまとめていき活動していくことを、自分だけでなく同期全員で楽しみにしていた。し

かし二月の中旬から新チームでの活動を再開してからたった二週間ほど活動しただけで、コロナウイルスの影響で部活動が停止になってしまった。私は三月中にチームとしてではなく個人的にニュージーランドヘラグビー留学に行っていたため、大学のチームメイトがラグビーをしていない間も活動できた。しかしその留学もコロナの影響で早く帰国することになり、留学生生活を全うする事が出来なかった。このような状況下で結局部活動の再開が許可されたのは、成城大学ラグビー部が所属するリーグの8大学の中でも最も遅い9月8日であった。しかし結果的に考えてみると、この経験は自分の人生にとって本当に必要な貴重な経験となった。

私は今年度主将をやらせていただいたので、副将、主務の選手や監督、コーチなどと協力して今何ができるのか、何をやるべきなのかという事を考えながらコロナ禍で色々な制限がある中活動した。まず考え方の部分で、私たちは昨年全敗で最下位だったため、ほかのチームも満足に練習できず、スタートがほぼ一緒になり例年より準備期間が短くなるというのは、逆に自分たちにとっては良いのではないかと考えた。やはりまず考え方をポジティブなものに変えることでモチベーションを何とか保とうとした。そしてそういった考えのもと、対面で何かをすることができないので、オンラインでの戦術などへの理解を高めるための週1回のミーティング、週3回のトレーニングなどをチームとして行った。ミーティングは一回90分、トレーニングは一回40分とそれほど長い時間ではなかったのだが、オンライン授業で課題が多く心に余裕がない後輩たちから週三回40分のトレーニングすらきついと文句を言われたりした。正直自分たちはそれくらいはやってもらわないと困ると思っていたので、何度も話し合いをして何とか理解してもらえるようにはなったが、やはり不満のある中でのトレーニングやミーティングであったので、なかなか真剣に取り組んでももらえないこともあった。しかし頑張っって何とか取り組んでもらえるよう話をし続け、何とか練習再開まで続ける事が出来た。

そしてこれ以外に大変だったのが練習再開に向けての大学との交渉である。やはり部活動はコロナ感染拡大のリスクがあるので学校として再開させたくないのも当然であると思う。そういった中で何とか再開してもらえるように何度も学生課の方に電話をして、なぜ早く再開しなければならないのか、部活としてどういった感染対策を取るのかなど丁寧に説明することで再開する事が出来た。

そして9月8日に練習再開し、その約二か月後公式戦がスタートした。例年であれば同じリーグの8チームと総当たりの七試合をやるのだが、今年はコロナの影響もあり4試合だけの実施となった。去年は全敗、そして一昨年一勝しかできなかったチームが、19人しか登録メンバーのいない厳しいチーム状況の中で、4試合のうち2勝する事が出来た。本当にどんな状況になっても、やるべきことをしっかり考え地道に努力していれば、結果が出るという事を実感する事が出来る素晴らしい経験となった。実際にグラウンドに出て体を動かさない状況、ほかの大学は活動を再開しているのに自分の大学は再開を許可してくれないなど、もどかしい部分はたくさんあったが、そこで気持ちを切らすことなく自分ができる事やるべきことを積み重ねる事の大事さを、改めてこのコロナ禍の状況から学ぶ事が出来た。今ではこのような状況でこういった経験ができた事、そして周りで支えてくれた保護者や監督、コーチの方々に心から感謝できている事を、本当に良かったと思っている。

8. コロナ禍の影響～私の学業内外から～ 文芸学部文化史学科 津田隼之介

私にとっての2020年は、学業の内外に関わらず、非常に試練の多いものだったように思う。以下では、学業内外の生活で新型コロナウイルスの影響を被ったと思われる内容を綴っていく。

まずは学業内での生活である。私たちは、大学卒業の為、また教員免許有取得の為に成し遂げなければならないことが、比較的たくさんある。文芸学部に所属する私は、卒業の為にまず卒業論文を執筆せねばならない。また私の専攻する民俗学の性質上、フィールドワークが必要不可欠である。特に私は東日本大震災で被災した経験を語る語り部の方々を調査対象としていたので、幾度と無く被災地に赴き、語り部たちに取材を試みていた。ようやく取材が軌道に乗ってきたその時に、新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言が発令されてしまった。東北への取材旅行など言語道断な世の中に変わってしまったのだ。ゼミの教授からの手厚いサポートもあり、なんとか電話取材という形に落ち着いた私はまだ恵まれていた方だが、ゼミ内には取材先に苦心する者も多かった。コロナ禍はこのように、一部の学問を全く手詰まりにさせてしまう影響力があったのだ。

また教育実習においても、その影響は執筆に値するものがある。まず実習の時期が例年と大きく外れてしまった。3年生の段階から5月～6月の実習を目掛けて授業準備をしていた私は、授業範囲を大きく外れてしまったのだ。また実習中も生徒と昼食を共にすることができず、実習中に予定されていた体育祭も中止になってしまった。生徒と親睦を深める機会を大きく逸してしまったのだ。以上のように、学業内においては卒業論文と教育実習において、特に影響を受けてしまった。

次に学業外においてである。私の母について記述させて欲しい。今年の4月、母はこの世を旅立った。約4年前から大病を患っていた母は、ちょうど新型コロナウイルスが流行り出した辺りから治療を諦め、地元の総合病院の特別な病室で余生を過ごし始めた。

まずここで困ったのは、面会の制限がかかったことである。入院病棟に取って感染症は絶対的に回避しなければならないものであり、それを持ち込む可能性のある面会者は極力入れたくない。よって初めは血縁者以外の面会禁止、さらに血縁者であっても時間に制限を設けるようになってしまった。厳密に守られる規則ではなかったが、母と共に過ごし、身の回りのあれこれをする時間が制限されてしまったのは事実だ。また、本来であればこの病棟の入院患者は定期的に外出許可が下りる仕組みであったが、それにも様々な制限が設けられてしまった。出掛けることが好きで、車椅子での移動になっても出掛けたがっていた母を見るのは心が痛んだ。先生に無理を言って、1ヶ月のうち2回ほど、母を車に乗せて出掛けることができたが、まだ意識のある人間にとって、ずっと同じ病室で過ごすのは苦痛であっただろう。結局母は緊急事態宣言が出される前にこの世を去った。遺体を見ることができ、また小規模だが通夜葬式ができたことは、不幸中の幸いという他ない。コロナ禍の影響を死の間際で被っている人が、この世には一定数存在するのだ。

以上、新型コロナウイルスによって被った様々な被害について、私の学業内外から記述した。私たちの経験が、成城大学の学生の今後に少しでも寄与するならば幸いである。

9. 非正規雇用の危うさについて 文芸学部ヨーロッパ文化学科 川澄華子

コロナ禍におけるもっとも大きな問題は、経済の衰退と医療崩壊の危機であろう。その中でも学生である私が身をもって体験したのは、緊急事態宣言にともなうすべての活動自粛の影響である。以下では、アルバイトでの経験と、人とのかかわり方の変化について思ったことを述べる。

私は、スーパー銭湯のアルバイトを1年生の時から行っている。就職活動などもあったが、休職することなく続ける予定であった。しかし、緊急事態宣言が出され、その期間の間アルバイト先も休業を行った。もちろんのこと、私たちアルバイトは出勤することができず、自宅待機となった。私は家賃をアルバイトのお給料で賄っていたため、家賃を払うことが厳しくなり、親にお金を送ってもらった。6月になり、緊急事態

宣言は解除され、アルバイト先は2時間ほど営業時間を短縮したものの、営業を再開した。しかし、再開したからといっても、勤務状況はコロナ禍以前のようにはいかなかった。客足が減り、人件費の関係でアルバイトのシフトは大幅に減らされた。コロナ禍以前は同時に5人が出勤することができていたのだが、アルバイトの出勤が減らされた結果、多くて3人か平日などは1人も出勤できない日も少なくない。さらに、2時間営業時間が短縮されたことも、一定の労働時間と賃金をアルバイトで獲得することを困難にした。今まで、当たり前だった控室にアルバイトの人があふれる光景も3月以来見ていない。

私が、この経験から痛感したことは、非正規雇用者の「危うさ」である。私のアルバイト先も、正規の社員は緊急事態宣言中も出勤しており、当然ながら、生活は守られていた。営業再開してからのアルバイトと社員の差は歴然であり、アルバイトの人数を減らすのは社員の出勤日を減らさないためであるのは明白である。これは学生と社員という比較ではない。アルバイトの中には成人した人もおり、私のアルバイト先がすべての収入源であるという人も多くいる。同一労働同一賃金の導入により、今後はこのような事態が起こっても同じようなことにはならないのかもしれないが、私は今回このようなことを経験から、日ごろは大きく目に見えて、正規と非正規の労働者の違いはないと感じていたが、コロナ禍においてその差が露呈したように感じた。

次に全体的な人との関わりについて述べる。これまで毎日目まぐるしく友人や先輩、後輩、先生など多くの人と関わり生活してきた。それが突然、人と会うことが否定されてしまった。私は一人暮らしをしているため、誰とも会わず、家に一人でいることはとても苦痛であった。オンライン飲み会というものが流行したが、対面でないコミュニケーションはどこかさみしく、一人の部屋でむなしい気持ちになったことは、ある程度の外出ができるようになった今でもよく覚えている。当たり前だったことが当たり前ではなくなり、日ごろは何とも思っていなかった問題を、身をもって体感した。

10. コロナ禍の生活とこれからの生活について 法学部法律学科 大野大河

この新型コロナウイルスによって最も影響があった事は、何においても「リモート」で行われた事だと考えられる。

一番わかりやすい例で言えば、普段であれば対面で大教室にて行なっていたであろう大学の講義が、Zoomを用いてのオンライン授業であったり、事前に録音・録画した物を視聴して授業を行なうオンデマンド式の授業であったり、資料を見て授業とする方式だったり方法は様々であったが、基本的には家から出る事なく全ての授業を受けられた事は今までと比べると異質な物であった。

また、私は今年度は就職活動を行なっていたが、やはり自宅で活動をする事が多く、企業の説明会や面接、また内定した会社では内定式を自宅で受けることができたのは、やはり貴重な経験なのではないかと思われる。

私個人としての「リモート」での授業や就職活動、およびステイホーム週間の感想としては、案外快適な物であったという物である。というのも、私自身元から外に出る機会も大学程度であり、休日も家にいることが多かったため、長い期間家に居るのも苦痛ではなく、メリハリのある生活ができていたと感じる。

また、社会の流れとしては今後もリモートでの授業やリモートワークというのは増えていくと思われる。現状ではコロナウイルスが治まる傾向は見られないが、ワクチンや治療法等が普及しコロナウイルスが収束した後であれば、対面での授業や仕事は当然可能になるが、対面でもリモートでも成立するのであれば、選択肢の一つとしては有効ではないかと考えられる。例えば、リモートワークであれば、都心にオフィスのあ

る企業であっても地方にいながら出社も可能になり、通勤の時間や労力、交通費等も無くす事ができるため、企業・働き手共にメリットがあると思われる。これは大学生活でも概ね同様であり、単なる講義形式の授業であれば自宅学習でも足りる部分はある。ただし、実践を伴う授業や学生同士でのコミュニケーションが必要な授業においては対面の方が有効だと言える。具体的には運動を伴う体育の授業や、教職課程における模擬授業などにおいては実際に大学に行って、人前ですべきだと言える。

このコロナ禍で私が困った事を挙げるとするならば、一番はアルバイトがなくなったという事だと言える。私はホテルでアルバイトを行っており、主にレストランや宴会場での勤務であり、3月ごろにはコロナウイルスの影響で正社員を中心のシフトになりアルバイトの数が減った。同時期に就職活動があったため、その理由でも休んでいたが、現在もアルバイト削減のため私はホテルでのアルバイトは休んでいる。私は別で収入があったので問題は無かったが、アルバイトを一つしかやっていない学生にとっては死活問題になりうると感じた。

最後に、このコロナ禍で私が最も感じた事は、情報の取捨選択が重要だという事である。

テレビのニュースやワイドショーだけでなく、近年においてはインターネット上の情報も多くある中で、正しいものから信用性の低いものまであり、特にインターネットでは自分の利益のためであったり、誰かに対する悪意を持っていたりする間違った情報もあり、沢山の情報の中からどれが正しく、どれが信用に値する情報かを読み取る能力が必要だと感じた。また、当然ながらこの能力はコロナウイルスに限らず、政治の問題や社会問題、単なる噂話にも通じる物であり、これからの時代に必ず持つべき能力であると感じた。

おわりに

2020年における受講生たちの教育実習生としての経験、大学生としての経験、市民や生活者、労働者としての経験にかかわる記述を見てきた。その記述からは、COVID-19が受講生たちに大きな影響を及ぼしていること、しかもその影響の現れは、学生たちが生活し、学んでいる文脈に応じて、一人ひとり異なる固有のものとなっていることを認識できることだろう。COVID-19によって人々の生活や学びが大きく変容したと語られている2020年を、大学生は実際にどのように生きたのか、彼ら／彼女らはその年にどのようなことをどのように学んだのか、これらの一端を辿ることができる史料として、受講生たちが記した文章を読んでもらうことができればと願う。

冒頭に記したように、COVID-19がいつ収束するのか、未だに見通しが立たない。しかし、教育者側が状況に対応することに精一杯であった2020年とは異なり、今後は学習者一人ひとりの個別具体的な状態、状況に目を向けることができる余裕が出てくることだろう。

ただし、そのような余裕が生じたとしても、オンライン（ライブ、オンデマンド、ハイブリッド）の授業では、画面の向こう側で学んでいる学習者の状態や状況を想像することは難しいままであるかもしれない。受講生たちが2020年の経験を綴った文章は、対面する機会を得ることができないかもしれない学習者の葛藤、困難、心の揺れ動きなどを想像する手掛かりの一つとなり得るだろう。

最後に、多忙な時期であるにもかかわらず、また想起したくない経験があったかもしれないにもかかわらず、2020年の自身の経験を記述してくれた受講生諸君に深い感謝の気持ちを伝えたい。